

乙方遺跡発掘調査概報

OCHIKATA SITE EXCAVATION REPORT

—京阪宇治駅移転に伴う発掘調査—



1997

宇治市教育委員会

序

近年、宇治市では平等院を始めとする貴重な文化財が集中する宇治川谷口兩岸部分において、宇治橋架け替えなどの都市基盤整備や源氏物語散策の道整備、万葉歌碑建立などの文化観光基盤整備が実施され、より質の高い文化観光都市へと整備されつつあります。

今回の発掘調査の契機となりました京阪電鉄宇治駅移転工事は、宇治橋架け替えと府道京都・宇治線の拡幅工事に伴って、今までの京阪宇治駅を北側に移転し、新たな宇治市の玄関に整備するものであります。京阪電鉄株式会社、宇治京阪タクシー株式会社には、この移転に伴う埋蔵文化財の保護に対してご理解とご協力をいただき、円滑な発掘調査を進めることができました。

今回の発掘調査成果につきましては、詳しく後述するところですが、弥生時代から江戸時代の幅広い遺跡が発掘されました。特に弥生時代中頃の集落跡の発見につきましては、本市では数少ない貴重な成果であり、弥生文化成立期の宇治の様子を知るに重要なものであったと考えます。本書が多くの方々の目にとまり、宇治の歴史を知る上での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました京阪電鉄株式会社、宇治京阪タクシー株式会社、京都府宇治土木事務所、地元町内会をはじめ、発掘調査の実施についてご指導いただいた京都府教育委員会、調査に関してご指導・ご助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成 9 年 3 月

宇治市教育委員会
教育長 岩 本 昭 造

例 言

1. 本書は宇治市教育委員会が平成4年度に実施した、京阪電鉄宇治駅移転に伴う乙方遺跡の発掘調査成果の概要をとりまとめたものである。
2. 本書は、宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第38集にあたる。
3. 本発掘調査実施時の体制は下記のとおりである。

調査責任者；宇治市教育委員会	教 育 長	岩 本 昭 造	
調査担当者；宇治市教育委員会	社会教育課主事	杉 本 宏（1・2次）	
	同	荒 川 史（3次）	
調査事務局；宇治市教育委員会	参 事	頼 城 綾 子	
	同	社会教育課長	池 田 正 彦
	同	文化係長	吉 水 利 明
	同	主 任	山 本 敦 子
4. 本発掘調査の測量が使用した基準は平面直角座標第VI系である。
5. 本書が使用する須恵器型式は『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966による。
6. 本書が収録する遺物・関係資料は宇治市教育委員会が保管・管理している。
7. 本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課文化財保護係が行い、実務を杉本宏が担当した。本書の執筆分担・遺物写真撮影は下記のとおりである。

[執筆・写真]

- | | | |
|----------------|---|-----------------|
| I・Ⅲ・Ⅳ-1, 3・Ⅴ・Ⅵ | … | 杉本 宏 |
| Ⅳ-2-A | … | 吹田直子（宇治市教育委員会） |
| Ⅳ-2-B | … | 内田真雄（仏教大学文学部学生） |
| 遺物写真撮影 | … | 寿福 滋（寿福写房） |

[ご協力]

また、発掘調査や遺物の検討に際して専門的なご教示を下記の方々からお受けした。感謝したい。
高橋美久二（滋賀県立大学）、中尾正治・平井俊行（京都府教育委員会）、長友友子（立命館大学卒業生）

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の経過	4
IV. 1次調査の成果	6
1. 検出遺構	6
A. 弥生時代の遺構	6
B. 古墳時代の遺構	9
2. 出土遺物	16
A. 弥生時代の遺物	16
B. 古墳時代の遺物	21
3. 遺構の変遷	22
V. 2次調査の成果	24
1. 検出遺構	24
2. 出土遺物	26
3. 宇治郷の近世瓦師と山田源左衛門	34
VI. 3次調査の成果	36
抄録	38

挿図・表目次

第1図 調査地付近上空写真	2
第2図 調査遺跡と周辺主要遺跡	3
第3図 調査風景	4
第4図 調査トレンチの配置と周辺地形	5
第5図 1次調査地全景	6
第6図 中世後半の畝跡	7
第7図 1次調査地平面図	8
第8図 1次調査地西部の状況	9
第9図 竪穴住居S B 03実測図	10
第10図 竪穴住居S B 03全景	10

第11図	方形周溝墓 S D55実測図	11
第12図	方形周溝墓 S D55全景	11
第13図	竪穴住居 S B54実測図	12
第14図	竪穴住居 S B54及びその周囲	12
第15図	土壇墓 S K30・S K33・S K72実測図	13
第16図	土壇墓 S K30	13
第17図	土壇墓 S K33	13
第18図	各遺構の状況	14
第19図	弥生土器実測図 1	17
第20図	弥生土器実測図 2	18
第21図	竪穴住居 S B03出土石皿	19
第22図	須恵器実測図	20
第23図	須恵器集合写真	20
第24図	1次調査地の遺構変遷図	22
第25図	弥生時代乙方遺跡のイメージ図	23
第26図	A調査地全景	24
第27図	A調査地北半部	25
第28図	A調査地瓦出土状況	25
第29図	A調査地完掘状況	25
第30図	B調査地全景	25
第31図	A調査地平面図	26
第32図	軒瓦・軒棧瓦型式一覧	28
第33図	出土遺物写真 1	29
第34図	刻印拓本	30
第35図	出土遺物実測図 1	31
第36図	出土遺物写真 2	32
第37図	出土遺物実測図 2	33
第38図	養林庵鬼瓦銘拓本	34
表 1	山田源左衛門銘瓦・棟札所在一覧	35
第39図	調査地の状況	36
第40図	J R橋梁下出土瓦	37
第41図	調査地の完掘状況	37

I. はじめに

本報告は、京阪電鉄宇治線宇治駅の移転工事に伴い実施した、当該地に展開する乙方（おちかた）遺跡の発掘調査成果の概要を報告するものである。

京阪宇治駅の移転事業は、宇治川に架かる宇治橋の新規架け替えと主要地方道京都宇治線の拡幅に伴って計画されたものである。

従来の宇治橋は、昭和11年に橋長153m、幅員9m、13橋脚の鉄筋コンクリート製永久橋として架けられたものであるが、幅員が狭いため昭和32年には宇治橋拡幅が計画され、さらに昭和46年には水害対策として、宇治橋付近の河床掘削によって宇治川の疎通能力を秒900トンから1500トンに増加させることが決定され、従来の橋の下流に橋長155m、幅員約27m、6橋脚の新宇治橋として架け替えることとなった。

この橋位置変更は、当然のこととして橋を通過する道路位置の変更を含む兩岸部の整備を必要としていた。京阪電鉄宇治線は大正2年に開通した私鉄線で、宇治橋右岸に造られた宇治駅はその終着駅である。この一連の計画の中で、京阪宇治駅をJR奈良線宇治川橋梁北側に移転し、跡地を駅前広場として整備する事業が立案されることとなった。この移転予定地は、京阪宇治線軌道敷きと宇治川右岸堤防に挟まれたところで、宇治京阪タクシー株式会社の社屋や畑地として利用されていた。そしてこの辺りの畑地からは、以前より土器や瓦が採集されており乙方遺跡として周知されていたため、文化財保護法の規定によって、今回の発掘調査実施に至ることとなったものである。

乙方遺跡の発掘調査は移転事業の計画に伴って、まず、宇治京阪タクシー株式会社の社屋の移転建築予定場所の発掘（1次調査）、ついで新京阪宇治駅のホーム予定場所の発掘（2次調査）、そして新京阪宇治駅舎予定地（3次調査）の発掘と、つごう3次にわたる発掘調査を平成4年度中に断続的に実施をした。

また、駅前広場整備や主要地方道京都宇治線の拡幅に関しても埋蔵文化財の発掘調査や指定文化財の移転作業及び発掘調査が行われているが、これらは財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターから「5. 宇治市街遺跡」『京都府遺跡調査概報第64冊』1995として、本市教育委員会から『東屋観音発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第36集）1996として既に報告されている。

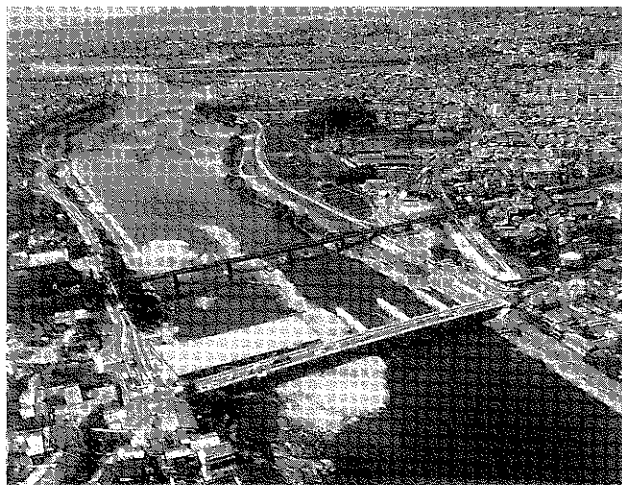
なお、新京阪宇治駅については、発掘調査後に建設工事が進められており、平成7年6月17日から利用開始、平成9年度中に整備完了予定となっている。新宇治橋については平成8年3月28日から利用されている。

Ⅱ. 位置と環境

調査地の位置 宇治市は、京都市の東南に隣接し、京都盆地の東辺部に位置する。市域の東部分は山地が広がり、西部には広大な巨椋池干拓地（昭和16年干拓）が展開している。琵琶湖に源を発し、山地を縫うように南下してきた宇治川は、宇治にいたって平野部に流れだし、現在は市域を南北に貫いている。しかしかつては、南山城盆地を北流してきた木津川や北山城盆地を南下してきた桂川・鴨川と共に巨椋池に合流しており、ここに巨大な遊水池を形成していた。歴史的な宇治の生活舞台は、この巨椋池と間際に迫った山丘に挟まれた狭長な平野であった。そして、このような地理的条件は、この土地を水陸交通の結接点として歴史の中にクローズアップさせる主要な要素となっていた。

調査地の所在する宇治乙方地区は、宇治川が狭隘な谷あい抜け、平野に流れ出す谷口部右岸の宇治橋東詰めに位置する。旧奈良街道ぞいには乙方の古い家並みが展開している。調査地は、京阪宇治線と宇治川堤防に挟まれた標高16～18m程度の平坦地であり、畑や水田、茶畑として利用されている場所である。ことに標高16mの等高線は、近代までの宇治川右岸の川岸崖と多くの部分で重なり近世の舟泊の跡も残っているため、調査地は川岸と直ちに面している状況にあったことが理解できる。

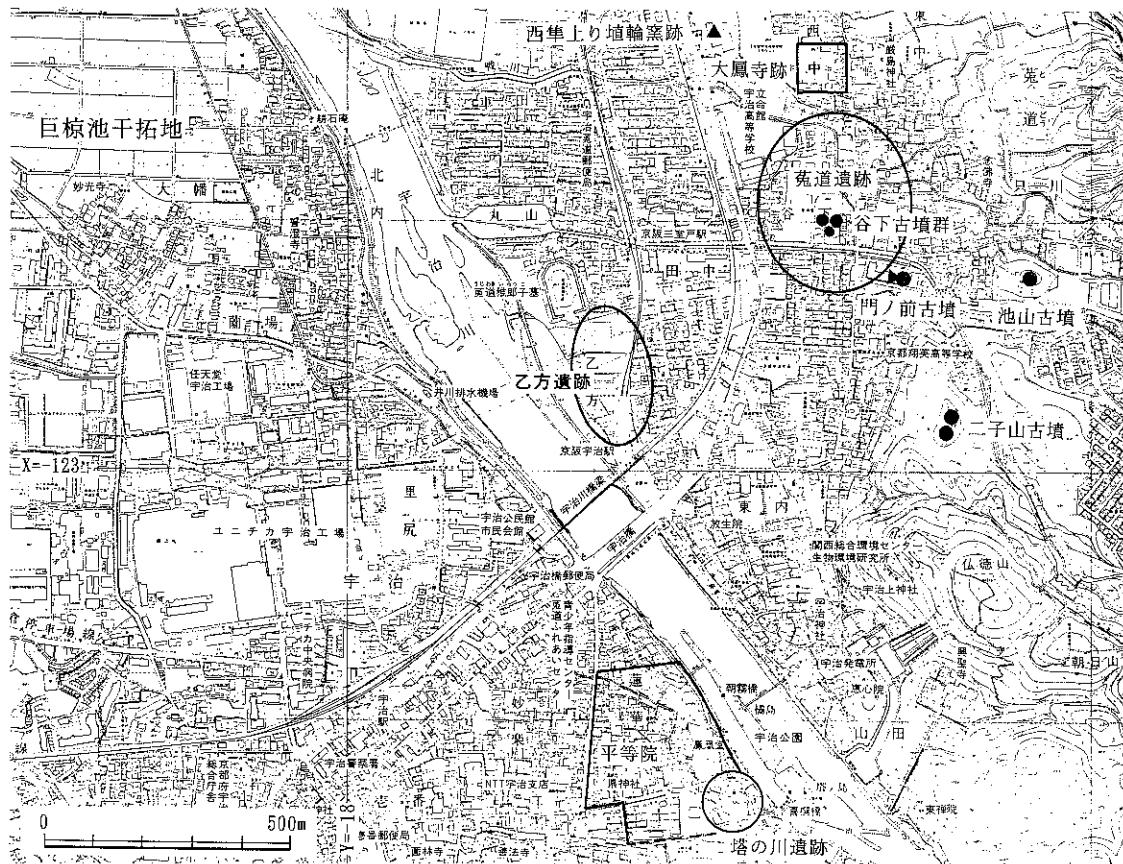
歴史的環境 乙方地区の歴史的環境を考えると、まず注意すべきは宇治橋の存在である。この橋は大化二年（646）の架橋と伝え、壬申の乱の時点（672）には存在が確認できる。ただしこの頃の架橋位置は、現在よりやや上流である可能性が高く、概ね現在位置に橋が架けられるのは平安時代後期以降と想定される。また、現在の宇治橋辺りは古代の宇治津の想定地ともなっている。乙方地区は宇治川渡河点や古代水上交通の要であった宇治川谷口部の一角に含まれる場所である。



第1図 調査地付近上空写真（南から）

周辺の遺跡について概観しておこう。まず、弥生時代については、乙方遺跡のほかでは平等院下層（塔の川遺跡）で弥生中期から終末にかけての土器がまとまって見つかった。この近辺の中では、他に弥生遺物を確認した地点はまだなく、現状ではこの両遺跡が宇治川谷口部での弥生時代の主要遺跡である。

古墳時代では、調査地の東丘陵上に甲



第2図 調査遺跡と周辺主要遺跡（平成8年測量図使用）

冑を多く出土した中期の宇治二子山古墳、その北に形象埴輪を多く出土した後期の前方後円墳門ノ前古墳と群集墳の谷下古墳群がある。集落としては、谷下古墳群周辺に広がる菟道遺跡があり、前期から後期の住居跡を検出している。また、塔の川遺跡でも古墳時代を通じて集落が営まれている。古墳時代における当地の首長墓は、菟道遺跡周辺の山丘上に築かれており、この辺りがかつての宇治中枢地区であった事を示している。調査地の北側の宇治川岸に宮内庁が管理する菟道稚郎子（ウジノワキノイラツコ）墓がある。菟道稚郎子は記紀に登場する応神天皇皇子で、宇治の産土神として祭られている人物である。現陵墓は、明治期に小型円墳を下敷きに造営された前方後円形のものである。なお、国郡制の施行において宇治川は郡界となっており、右岸が宇治郡、左岸が久世郡である。

平安期では、対岸に平等院を始めとして藤原摂関家の寺院や別業が営まれ、乙方周辺でも別業の造営が記録されるが、その具体的遺跡については確認されていない。中世では、対岸の中宇治地区に町屋が形成され、乙方地区も旧奈良街道ぞいに集落が展開し始める様子が、断片的ながら当地区での調査成果から窺える。江戸期では宇治郷の一部として宇治代官の支配を受け、宇治橋たもとの集落として賑わいをみせている。ちなみに乙方は、江戸期においては「大路方」とも「彼方」とも表記されていた。

Ⅲ. 調査の経過

発掘調査は、宇治市宇治乙方34番地他において京阪宇治駅移転工事計画に伴って、つごう3次にわたって実施した。

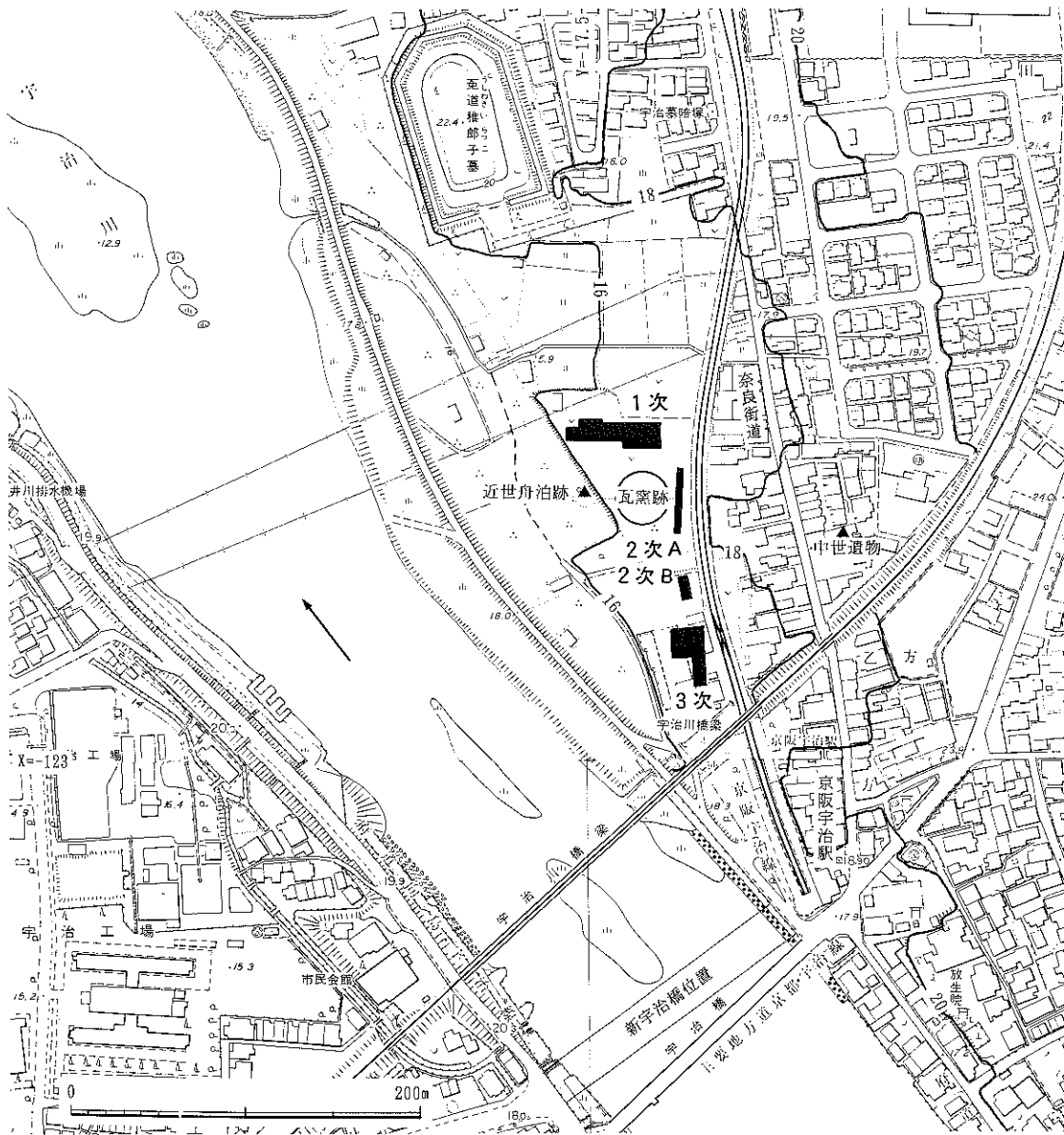
1次調査 1次調査は、宇治京阪タクシー株式会社の社屋建設に伴う発掘調査であり、平成4年5月15日から7月20日まで現地での発掘調査を実施した。発掘調査の面積は約780㎡である。調査地はかつての宇治川右岸の川岸崖に面する平坦な場所で、調査前は畑として利用されていた。調査地の北側には水田として利用されている谷地形が延び、その北に宮内庁管理の菟道稚郎子墓の森と住宅地が広がっている。調査地西の川岸崖は高さ2m程度で、旧川岸は茶畑として利用されている。この崖に接して、石で積み上げた近世の舟泊が残されている。調査地の標高は17.5m程度であるが、西半部のみ30cm程度高く島畑状の高まりを呈していた。

調査トレンチは用地の形に合わせて東西に細長く設定した。まず重機で表土を20cm程度除去したところ、西半部では鉄分の沈着した硬い地盤が現れ、その下で暗褐色の地山を基盤とした中世後半期の畝跡と弥生時代から古墳時代の遺構を検出した。東半部には鉄分沈着層はなく直ちに小石混じりの地山となり、後世の開墾によって削平されていることが理解された。



第3図 調査風景

2次調査 2次調査は、新京阪宇治駅のホーム建設に伴うものであり、平成4年9月14日から11月14日まで現地での発掘調査を実施した。発掘調査の面積はAトレンチが約150㎡、Bトレンチが約85㎡、合計235㎡である。調査地は道路と京阪宇治線軌道敷きとの間に挟まれた南北に細長い場所である。北側に設定したAトレンチは、茶畑として利用されていた所であり、南のBトレンチは宇治京阪タクシー株式会社の駐車場となっている場所である。Aトレンチ西側の茶畑（現在は駐車場）には、江戸期の瓦片や焼けた壁土状のものの散布がみられ近世瓦窯の存在が推測された。Aトレンチは、用地の形に合わせて南北に細長く設定した。まず重機で表土を20cm程度掘



第4図 調査トレンチの配置と周辺地形（平成元年測量図使用）

削したところ、北半部で江戸期の瓦溜まりを検出した。南半部は小石混じりの地山上に近世以降の遺構が散見された。Bトレンチは表土を50cm程度掘削したところ礫を顕著に混在する地山となり、遺構は検出されなかった。

3次調査 3次調査は、新京阪宇治駅舎建設に伴うものであり、平成5年2月1日から3月12日まで現地での発掘調査を実施した。発掘調査の面積は約420㎡である。調査地は宇治京阪タクシー株式会社の社屋跡地である。調査は、重機で建物基礎及び表土を排除することから開始した。調査地全体に近代以降の置き土が厚く堆積しており、その下層に江戸期の水田が検出された。近年の土地改変が激しい場所であることが理解された。

各次とも発掘完了後に写真撮影・写真測量による記録作成を実施し、作業を終えた。

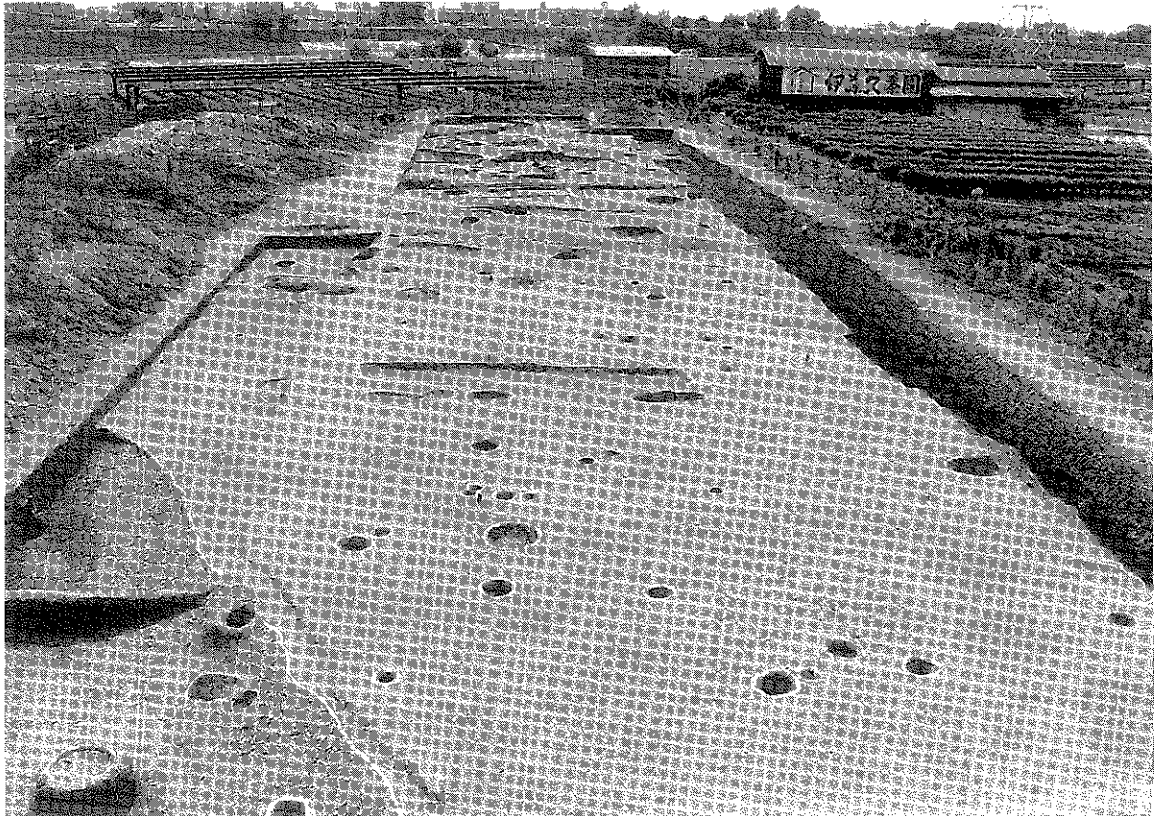
IV. 1 次 調 査 の 成 果

1次調査地は、かつての宇治川右岸に面した場所で、弥生時代中期から近世に及ぶ遺構と遺物を検出した。遺跡の中心となる時期は弥生時代中期と古墳時代後期であり、他の時期のものについては余り顕著ではない。また、遺構検出部は調査地西半部の一段高い場所に集中しており、東半部は近世以降の開墾で削平を受けていることが理解された。したがって、東半部で検出された溝や柱跡の大半は江戸以降のものである。

調査地西半部においても遺構検出面までは浅く、耕作土を除去すれば直ちに遺構が現れる状況であった。そのため顕著な遺物包含層の形成はなく、遺構自体の深さも浅目である。また、攪乱や所々に植えられていた樹木の株跡、鉄分沈着による土の変色が遺構検出にあたって悪影響を与えていた。

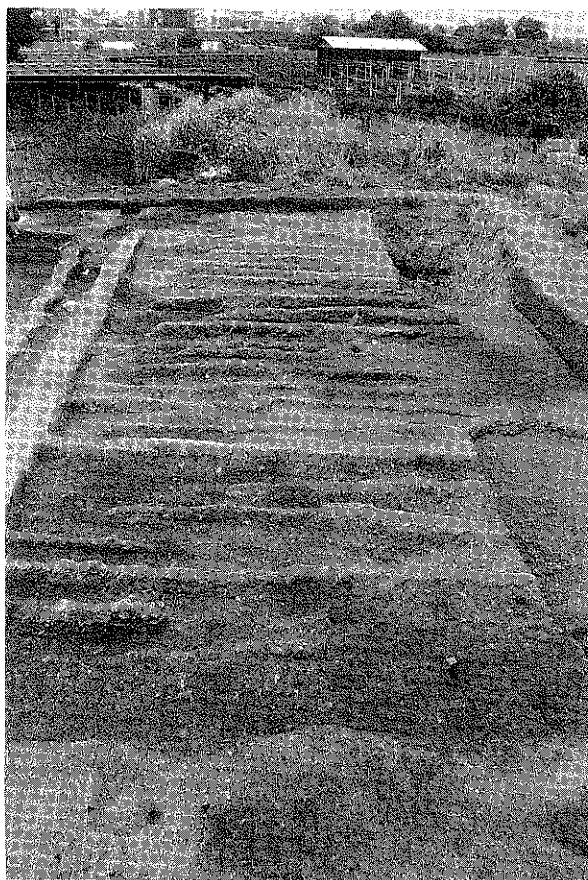
1. 検 出 遺 構

中心となる遺構は、後述する弥生時代中期と古墳時代後期のものであるが、それ以外の時代の遺構について少し触れておきたい。



第5図 1次調査地全景（東から）

まず江戸期の遺構には、素掘り井戸 S E57、地割り溝 S D17・02・18・20などがあり、江戸時代においては調査前と違う地割りで畑ないし茶畑が営まれていたことが理解された。調査地西部の S D17北側では、この溝に先行する南北の畝跡（第6図）を部分的に検出した。この畝跡からは近世の遺物の出土はなく、状況的に中世後半期の畑跡であると考えられた。また、調査西半部東南辺りでは平安後期のカワラケ細片の散布が認められ、土壌 S K74からは鎌倉前期のカワラケが出土している。調査地西南端の落ち込み S D81は、江戸期には埋没していた自然地形である。



第6図 中世後半の畝跡（東から）

A. 弥生時代の遺構

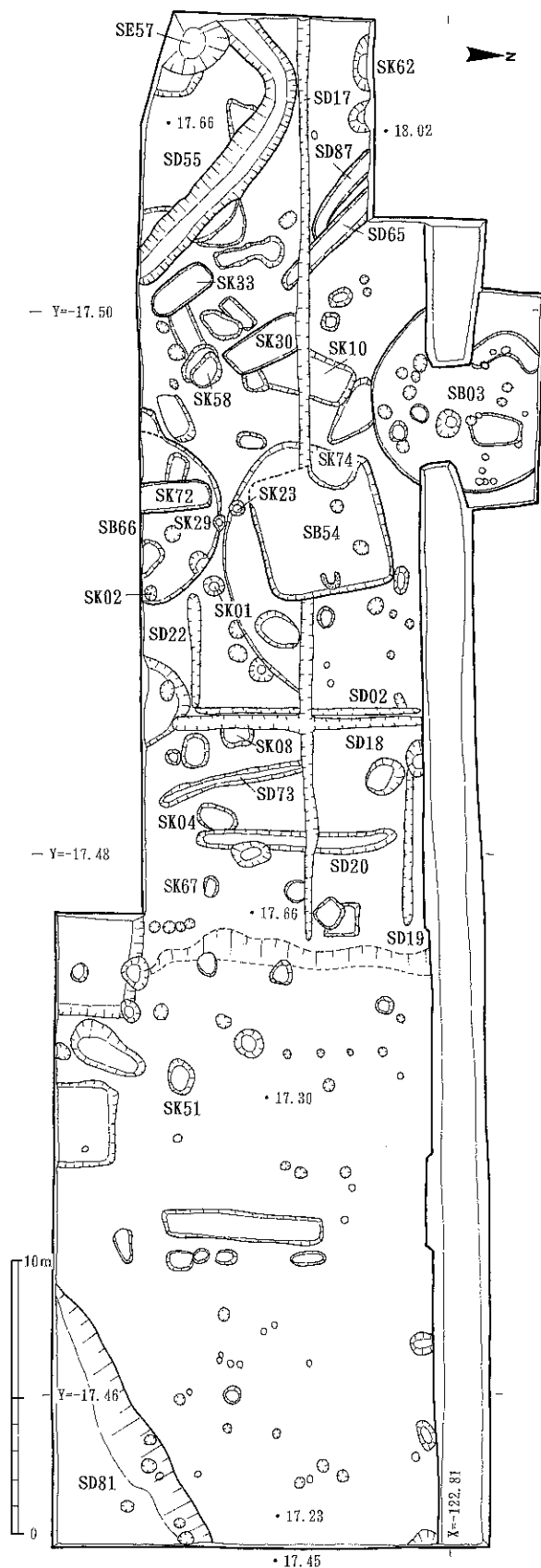
弥生時代の遺構としては、竪穴住居2棟、方形周溝墓1基、壺棺3基の他、土壌や溝

がある。時期的には中期前葉から中期中葉にかけてのものである

竪穴住居 S B03 この竪穴住居跡は調査地の西北部で検出したもので、推定直径7.5mを計る円形住居である。中世の畝で削平を受けかろうじて残っていたにすぎず、深さは数cmである。住居内には柱跡や土壌が複数認められたが、住居跡に伴うものを確定できなかった。炉跡はない。床面からは遺存状態が良い甕形土器1個体と壺口縁部片、石皿破片が出土した。弥生時代中期前葉。

竪穴住居 S B66 この竪穴住居跡は調査地の西南部で検出した円形住居であるが、南側が開墾で削られているため規模は不明である。状況的には S B03に類似する大きさと考えられる。住居の壁に重複して壺棺 S K29が存在するが、壺棺は竪穴住居の埋没後に埋納されたと考えられる。時期の確定できる遺物の出土はない。弥生時代中期前葉以前。

方形周溝墓 S D55 調査地の西端で検出した方形に巡ると想定できる溝であり、方形周溝墓と推定している。遺構の南・西側は切り立った川岸崖となり、南半分を失っている。ただ、かろうじて残った一辺から、墳丘規模は8mほどと想定できる。溝の断面形は内側斜面がやや緩やかな逆台形状を呈し、溝上端幅1.5mほど、下端幅50cmほど、深さ50cmほどを測る。埋土は暗褐色土の単層で、下層部から細片化した甕形土器や壺形土器の破片が整理箱半



第7図 1次調査地平面図

分ほど出土した。弥生時代中期中葉。

壺棺 S K 01 調査地西半部中ほどで検出した、壺形土器1個体を埋納した土壌。壺棺としてよい。土壌は直径70cmほどの円形を呈し、中央に口縁部を南西に向けた器高33cmほどの完形の丹塗壺形土器が置かれていた。壺は横位よりやや口を上向きにした状態であり、口縁部と頸部の一部を削平により失っていた。口縁部と体部内側には、高杯の杯部破片が認められた。合わせ口の蓋として利用されたものであると考えられる。弥生時代中期後葉。

壺棺 S K 23 竪穴住居 S B 66の北側で検出した、壺形土器1個体を埋納した土壌。壺棺としてよい。土壌は直径50cmほどの円形を呈し、中央に口縁部を北東に向けた器高38cmほどの壺形土器が置かれていた。壺は横位よりやや口を下向きにした状態であり、口を土壌壁に密着させるような状況であった。体部上半分と底部を削平により失っている。また口縁部の土壌底と接する部分は打ち欠かれていた。口縁部付近には蓋を思わせる遺物の出土はなく、壺の埋納時に埋土が入らないように口をやや下向きにした際、土壌底と干渉する口縁部を調整したためと思われた。弥生時代中期前葉。

壺棺 S K 29 竪穴住居 S B 66の北壁部と重複して検出した、壺形土器1個体を埋納した土壌。壺棺としてよい。竪穴住居 S B 66に後出する遺構である。土壌は直径50cmほどの不整形円形を呈し、中央に口を南西に向けた器高28cmほどの口頸部を打ち欠いた



第8図 1次調査地西部の状況（西から）

壺形土器が置かれていた。壺の上半分を削平により失っている。壺は横位より心持ち口を上向きにした状態である。蓋を思わせる遺物の出土はなく、打ち欠いた口頸部が蓋として利用された形跡もない。弥生時代中期前葉。

土壌S K51 後世の削平を受けた調査地東半部で検出した、唯一の弥生時代遺構。直径1m程度の不整形土壌であり、深さは10cmほど。弥生時代中期の土器破片が数点出土した。

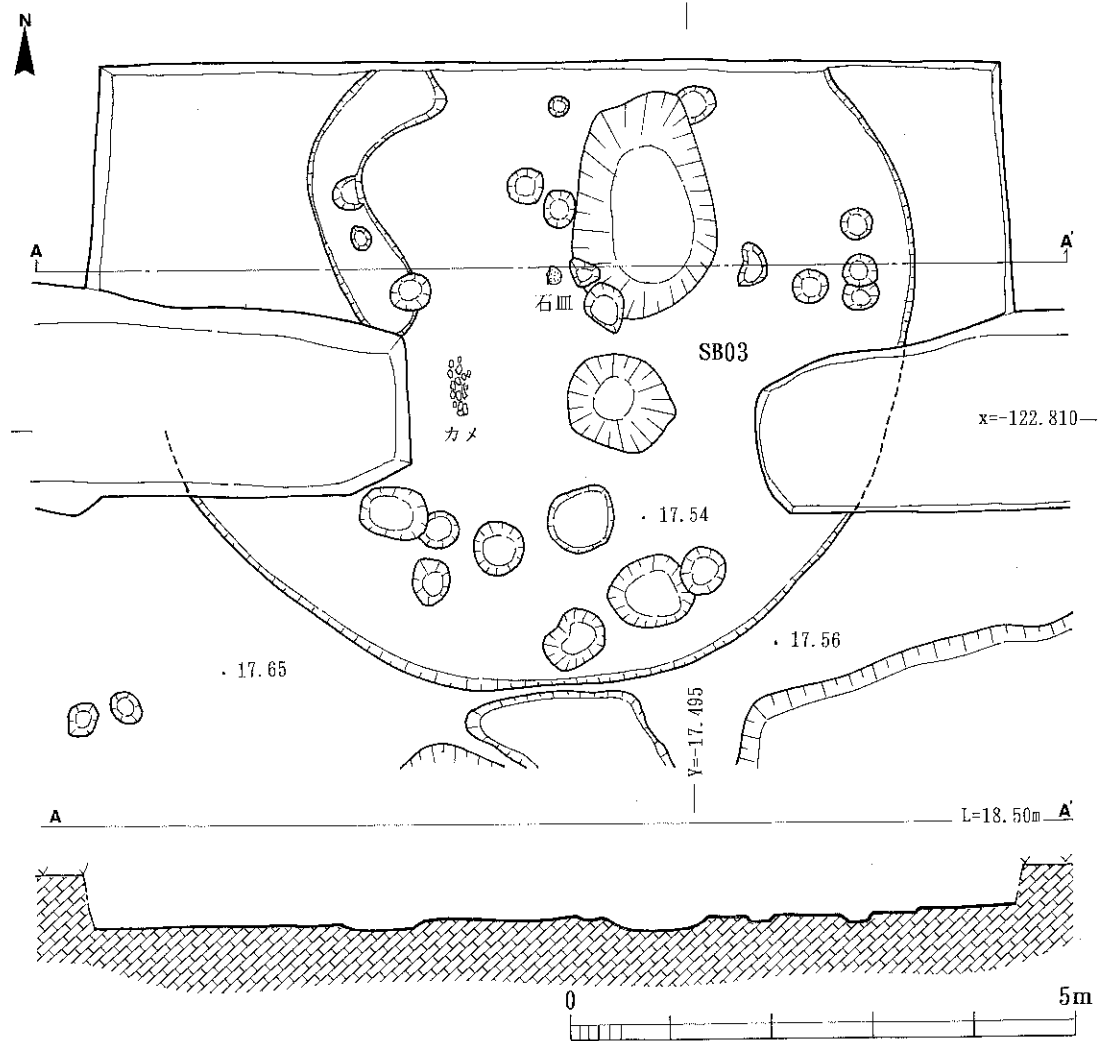
土壌S K67 調査地西半部東端で検出した直径60cmほどの円形土壌。内部より器高17cmほどのほぼ完形の小型甕形土器が出土した。状況的に甕棺として使用されたものとは思われない。弥生時代中期中葉。

溝S D87 調査地西半部西端で検出した浅い溝。壺形土器を始め、土器片が数点出土した。弥生時代中期前葉。

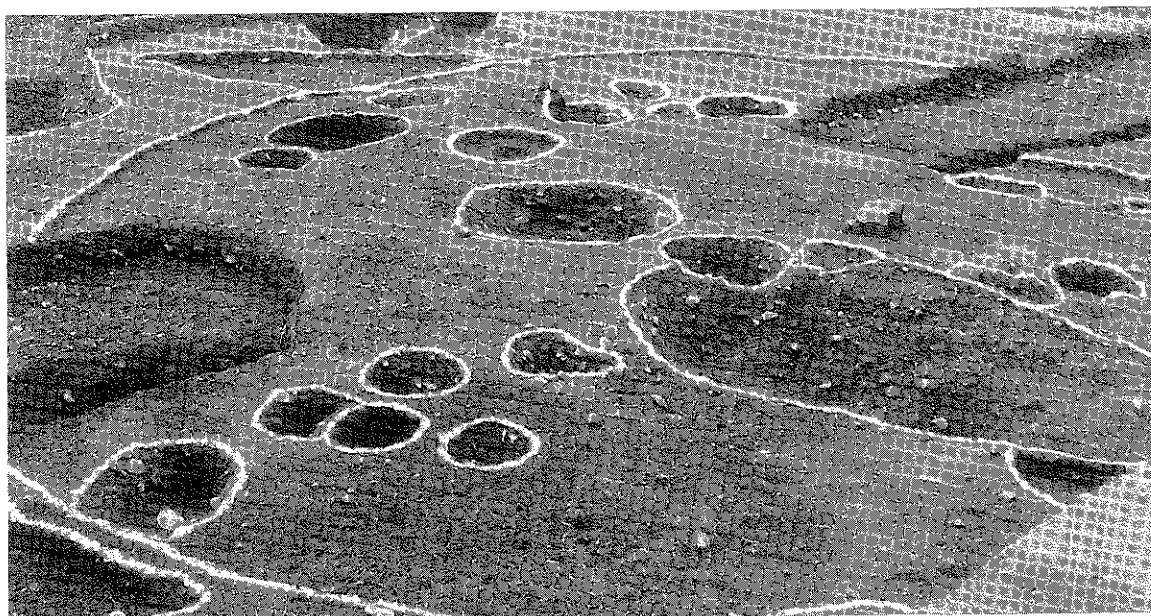
B. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には、竪穴住居1棟、土壌墓3基の他、土壌や溝がある。時期的には後期前葉から末葉にかけてであり、年代的には6世紀中ごろから7世紀初頭に比定できる。

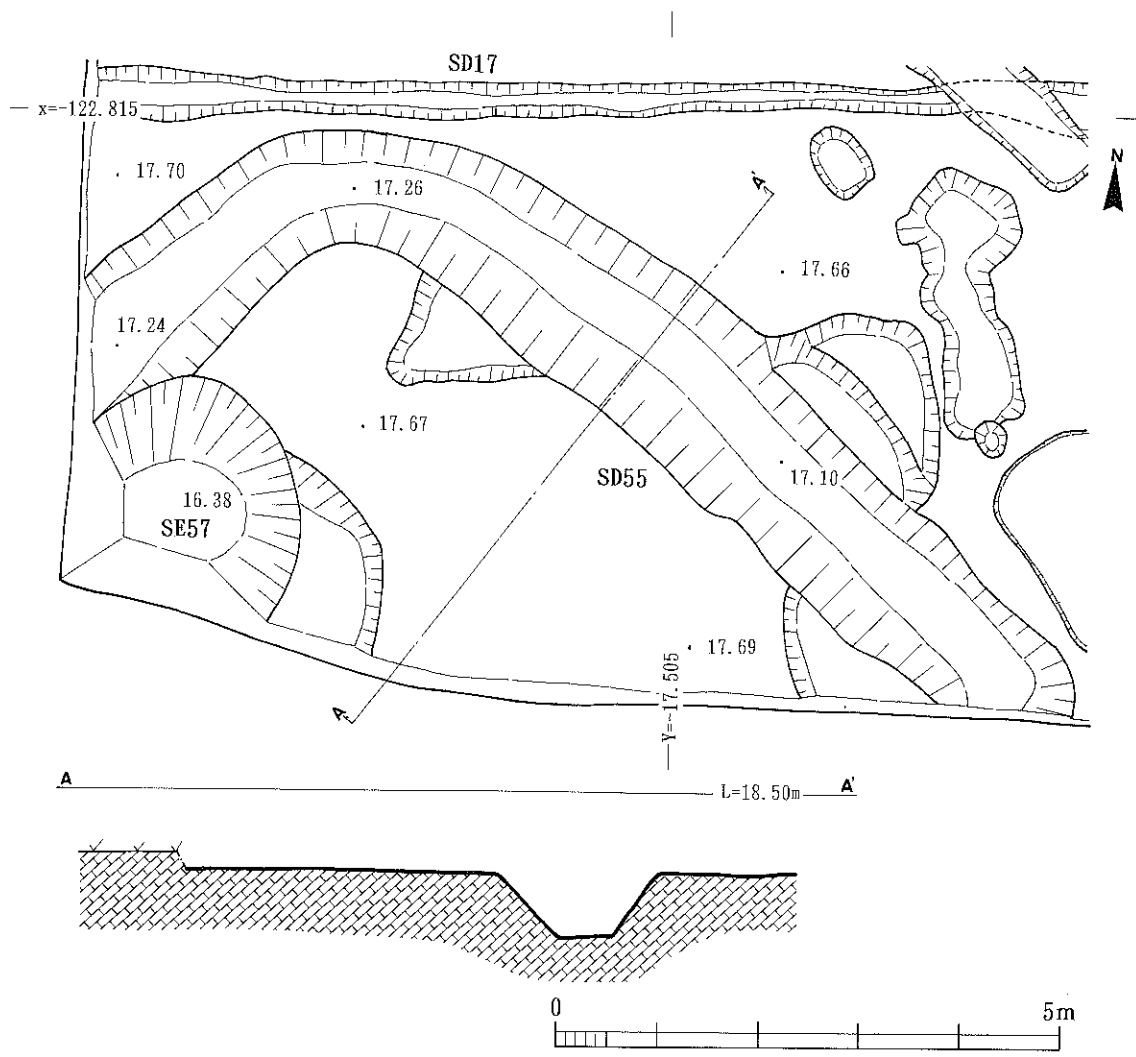
竪穴住居S B54 調査地西半部中央で検出した方形竪穴住居である。西辺は鎌倉時代の土壌S K74と時期不明の大きな掘り込みによって、確認できなかった。南北の幅は約4.7m、東西の幅は約4.9m程度に復元できる。深さ30cmほどを測る。東辺中央には、粘土で造った



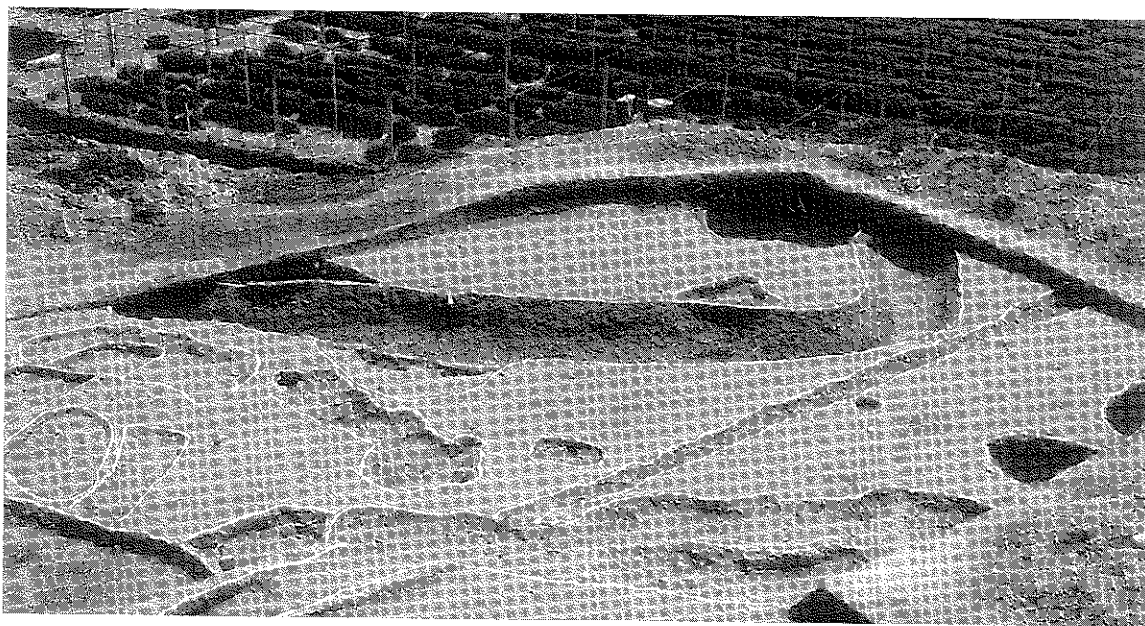
第9図 竪穴住居SB03実測図



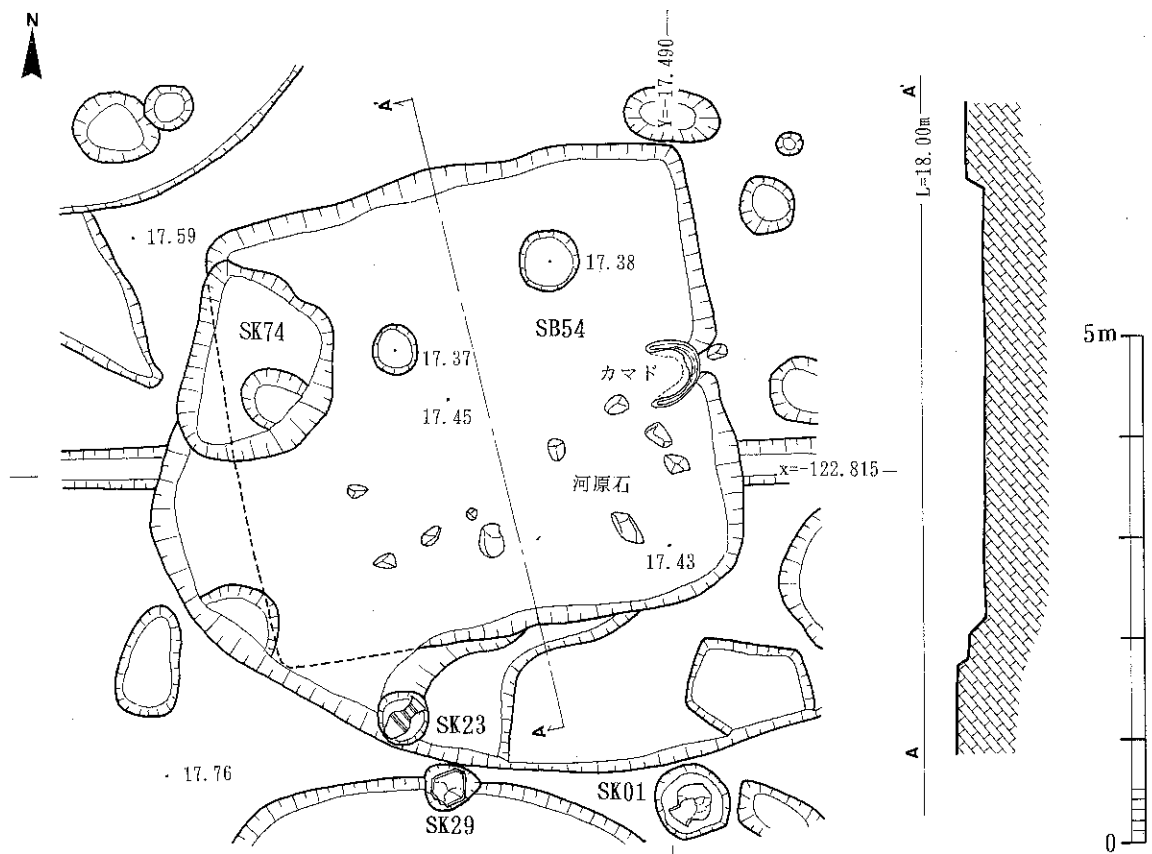
第10図 竪穴住居SB03全景（東から）



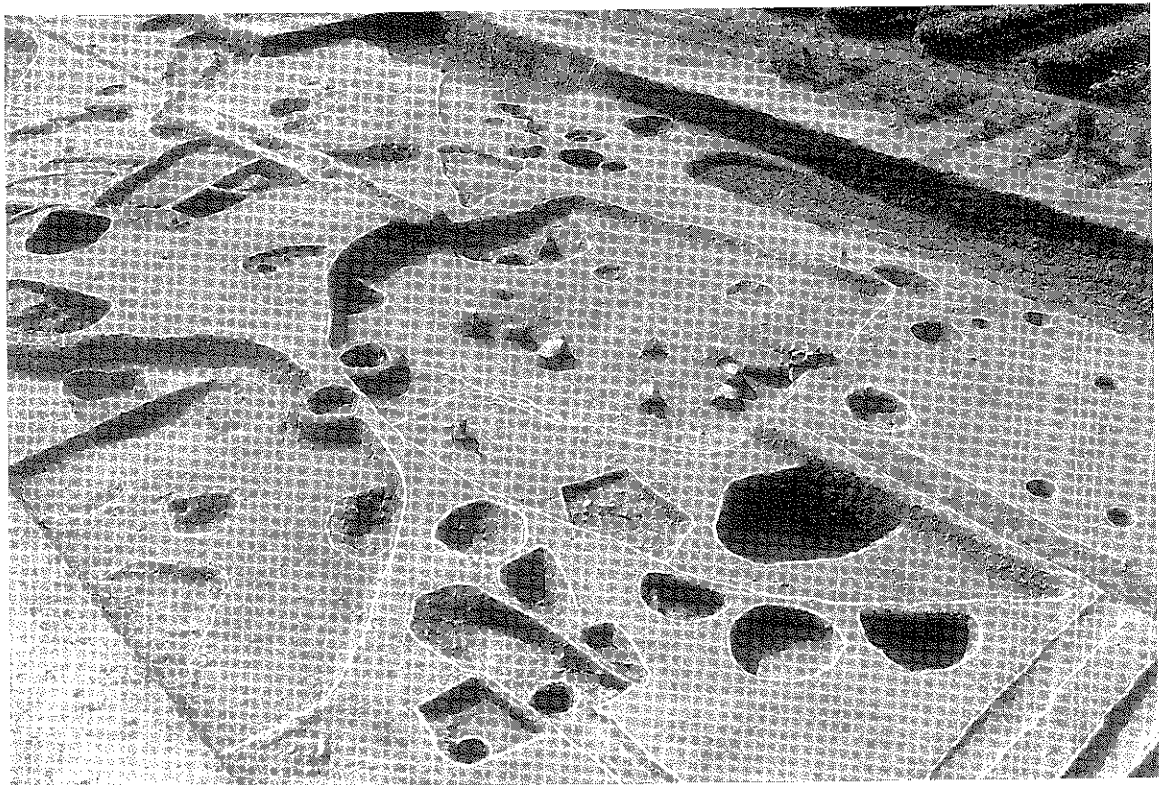
第11図 方形周溝墓SD55実測図



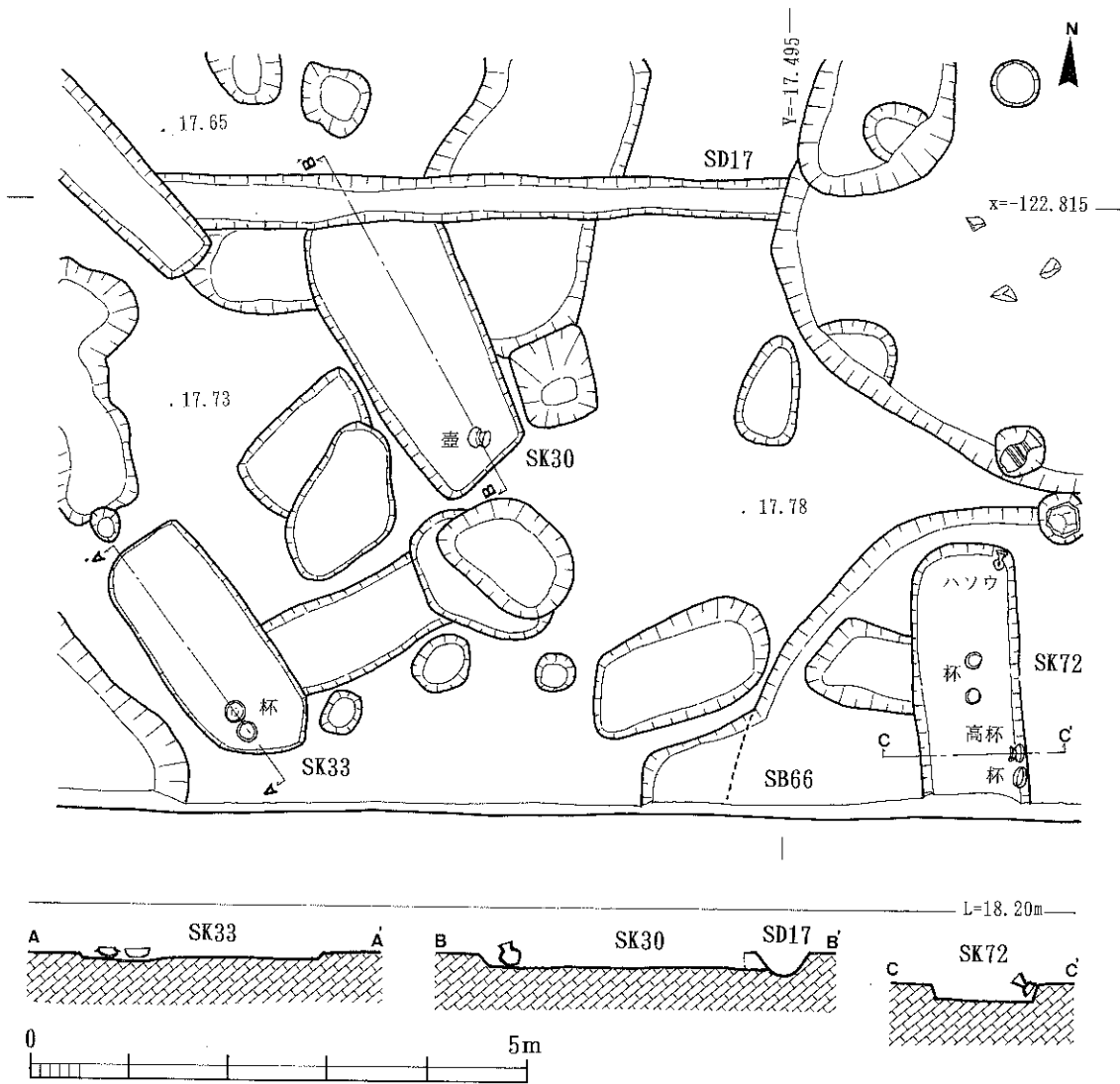
第12図 方形周溝墓SD55全景（北東から）



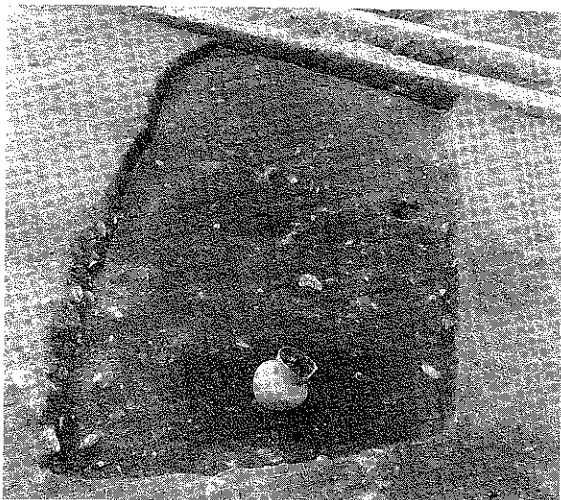
第13図 竪穴住居SB54実測図



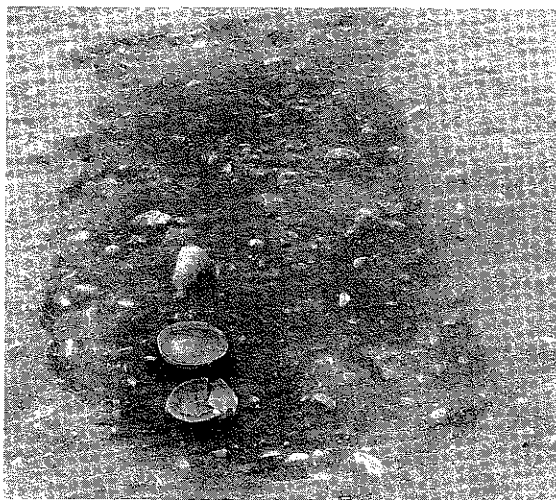
第14図 竪穴住居SB54及びその周囲（南東から）



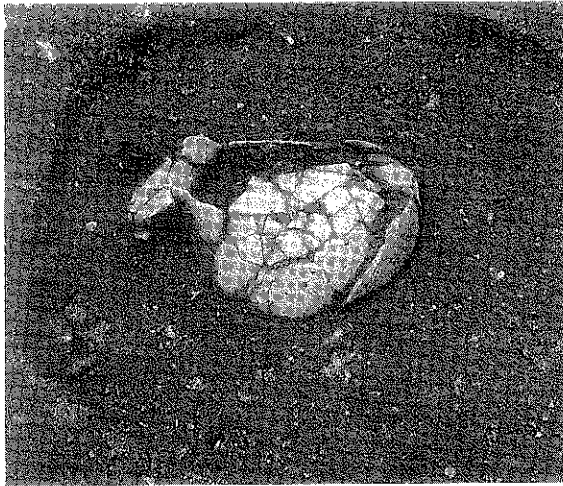
第15図 土墳墓SK30・SK33・SK72実測図



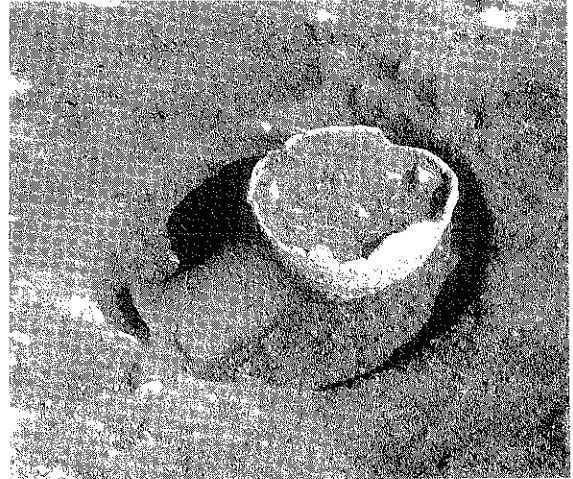
第16図 土墳墓SK30 (南東から)



第17図 土墳墓SK33 (南東から)



A. 壺棺SK01 (南東から)



B. 壺棺SK23 (西から)



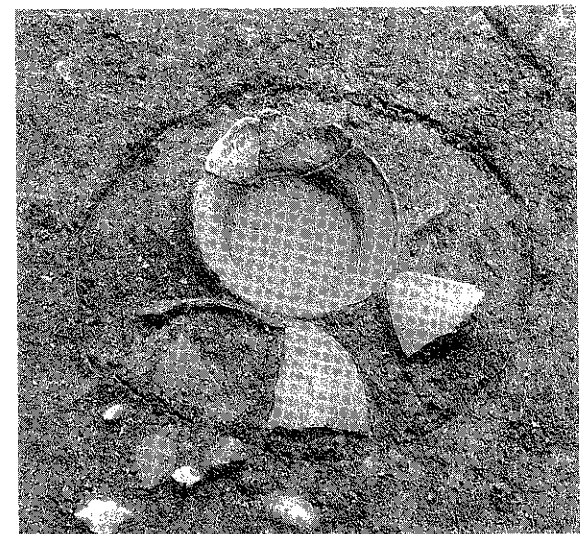
C. 壺棺SK29 (南東から)



D. 壺棺SK67 (南から)



E. 壺棺SK72 (南から)



F. 壺棺SK02 (北から)

第18図 各遺構の状況

カマドを付設している。カマドは熱により赤色化し硬化していた。灰はさほど顕著には認められなかった。床面には柱跡を思わせるピットが2か所存在するが、配置からみてこれが支柱穴とは考え難い。床面には拳大から人頭大の河原石が20個程度認められた。埋土中から7世紀後半に比定できる須恵器の壺や甕の破片が出土した。直接この住居跡の年代を示す遺物は検出されていないが、状況的には古墳時代後期の中でも新しい段階のものであると考えられる。

土壌墓 S K 30 調査地西半部で検出した長方形土壌である。土壌墓としてよい。軸線は北からやや西へ傾く。幅約1.7m、長さ推定3m、深さ10cmほどを測る。北端は江戸期の地割り溝 S D 17によって断ち切られている。土壌の南端部中央には、完形の須恵器の壺がほぼ正位置で置かれていた。副葬品であろう。後期中葉。

土壌墓 S K 33 土壌墓 S K 30の西側で検出した長方形土壌である。土壌墓としてよい。かろうじて底部が残っていたにすぎず、深さは数cm程度である。軸線は前述の土壌墓 S K 30とほぼ並行する。幅は約1.1m、長さは約2.6mを測る。南端部のやや西寄りには、完形の須恵器の杯蓋と杯身が口を上にして置かれていた。杯身が南、蓋が北側である。この杯身と杯蓋は合わせものである。副葬品であろう。後期中葉。

土壌墓 S K 72 弥生時代の竪穴住居 S B 66と重複して検出された長方形土壌である。南半分を開墾により失っている。土壌墓としてよい。前述2例の土壌墓とは違い、軸線をほぼ南北に置いている。幅は約1.1m、長さは検出範囲で約2.5mを測る。竪穴住居 S B 66と重複していた関係で、この土壌墓を認識したのは竪穴住居がほぼ掘り上がった時であり、竪穴住居床面で遺構ラインを把握した。出土遺物は北端部東端に完形の須恵器ハソウ、中ほどに完形の須恵器の杯蓋と杯身が口を上にして置かれていた。杯身が南、蓋が北側である。この杯身と杯蓋は合わせものである。南端部の東壁寄りでは口を上に向けた須恵器杯身と口を伏せた高杯が並んで発見された。高杯については、副葬時から脚部を縦半分欠いていたと思われる。副葬品であろう。これらの遺物は、中ほどから出土した杯身・蓋以外は、竪穴住居掘削中に検出され取り上げられたため、第18図-Eの写真は、完掘後に元の位置に置き直して撮影したものである。後期中葉。

土壌 S K 02 竪穴住居 S B 66と重複して検出された円形土壌である。直径30cmほどを測る。内部からは須恵器壺の下半部と杯身の破片がかたまって出土した。壺の下半部は、それ自体では完全であり、破面も比較的そろっていることから、この状態で杯身の代用として使用されていた可能性がある。後期後葉。

土壌 S K 62 調査地西端部で検出した土壌。須恵器杯身片や甕体部片が出土した。後期末葉。

2. 出土遺物

1次調査で出土した遺物は、時代的には弥生時代から江戸時代に及び、整理箱で10箱程度の量がある。中心となる遺物の時代は弥生時代と古墳時代であり、以下にその概要を報告する。なお、奈良時代から江戸時代の遺物に関しては、土師器・須恵器・陶器・カワラケの小破片や、錆化の著しい北宋銭等があるが、図化不可能なものが多く割愛する。

A. 弥生時代の遺物（第19図～第21図）

壺棺SK01 合わせ口棺として転用された広口壺（2）と高杯（1）がある。2はほぼ方形の広口短頸壺で、器高33.4cm、口縁径19.0cmを測る。頸部からの屈曲が緩やかな算盤玉状の体部をもつ。外面には底部よりやや上方から中央部まで目の密な縦ハケが、体部上半に目の粗い縦ハケが施される。粗ハケはこの後軽くナデ消しが行われたようである。後に頸部から肩部にかけて櫛描直線文と波状文が施文される。櫛描文は10条／帯で構成される。施文後、最大径付近に横方向のヘラミガキが施される。体部内面にはタテ方向のハケが施される。口縁部は、ほぼ直立した頸部から緩やかに外反し、端部を上下に肥厚させる。内面には扇形文が、外端面には3条の凹線文が施される。また、焼成後に被熱を受けており、体部外面には煤が付着している。1は水平口縁高杯であるが、棺蓋として転用されており口縁部以下を欠く。口縁径21.0cm。口縁端はやや拡張気味に垂下している。口縁内突帯はやや内傾気味に突出する。いずれも第IV様式古相に相当する。

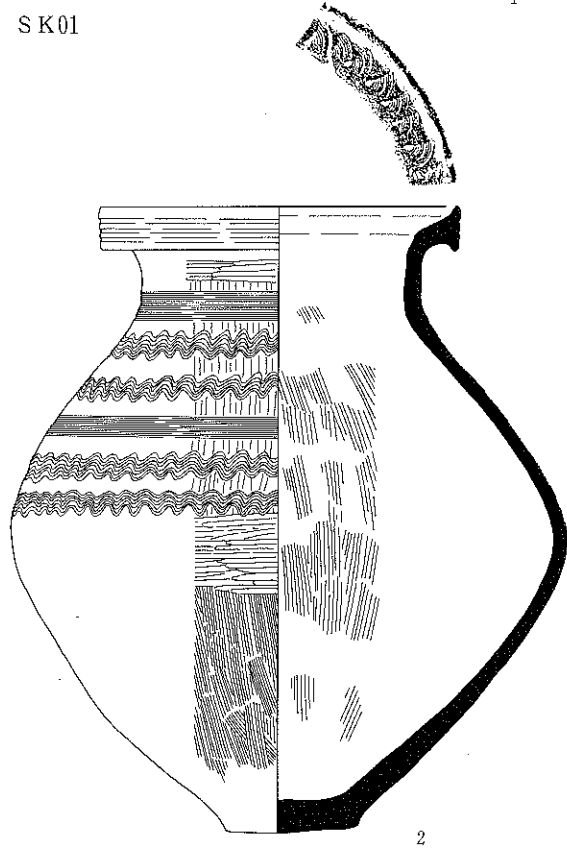
壺棺SK23 広口長頸壺（4）がある。棺に転用する際に口縁部を一部打ち欠いている。底部の欠損は後世の削平によるものである。現存高34.0cm、口縁径21.0cmを測る。焼成が甘く、他の個体と比べ摩滅が進んでいる。体部外面には、全面に縦ハケが施されているが施文帯部分はナデ消しが行われている。この後、櫛描直線文と波状文が施文されている。櫛描文は4条／帯。櫛目が粗い。内面調整は、ナデの後、口縁部から頸部にかけて左上がり気味に横方向のハケが施されている。頸部と体部の接合部に指頭圧痕が残る。口縁部は緩やかに外反し端部に面をもつ。煤が付着している。第II様式新相。

壺棺SK29 広口壺(3)は、頸部より上方を打ち欠いた後、壺棺として転用したらしい。長頸壺と考えられる。現存高28.6cm。体部は4に比べると球形に近く、中央付近に張りをもたせる。底部は平底で、中央部が皿状にややくぼむ。外面は全体をハケ調整後、複帯（2帯：6条／帯）の櫛描直線文を6帯施文し、以下の部分にヘラミガキを施している。内面にはハケ調整の後、ナデが施されている。第II様式新相。

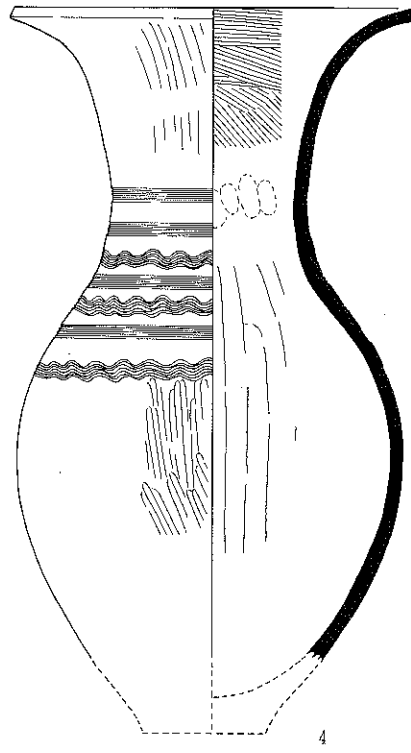
竪穴住居SB03 広口壺（5）と甕（6）と石皿（第21図）がある。石皿は、20.8cm以上×25.6cm×6.3cmという扁平な砂岩で、約半分を欠く。中央部が浅く皿状にくぼんでいる。



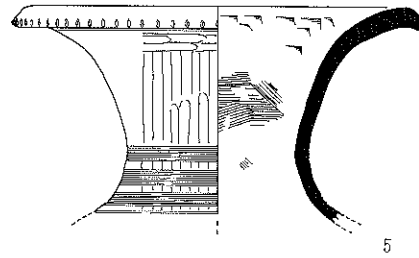
S K 01



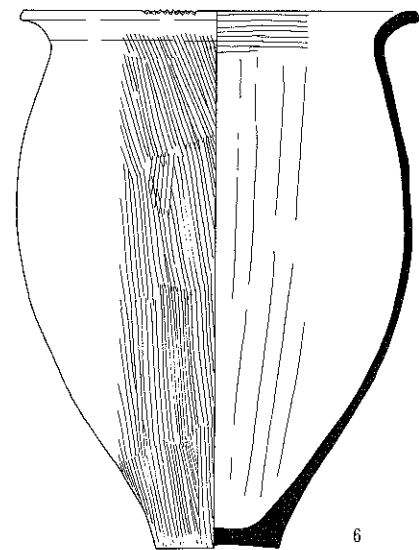
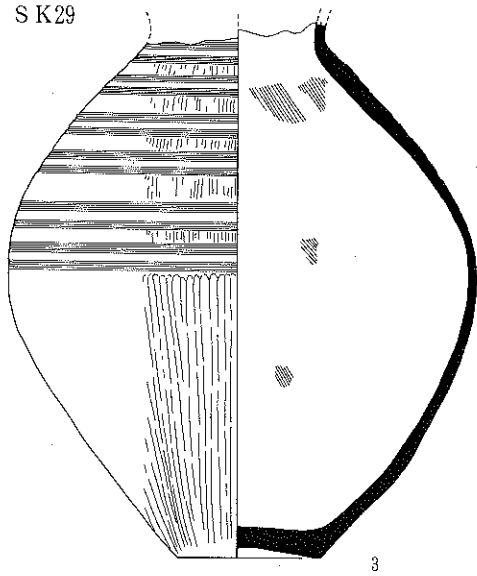
S K 23



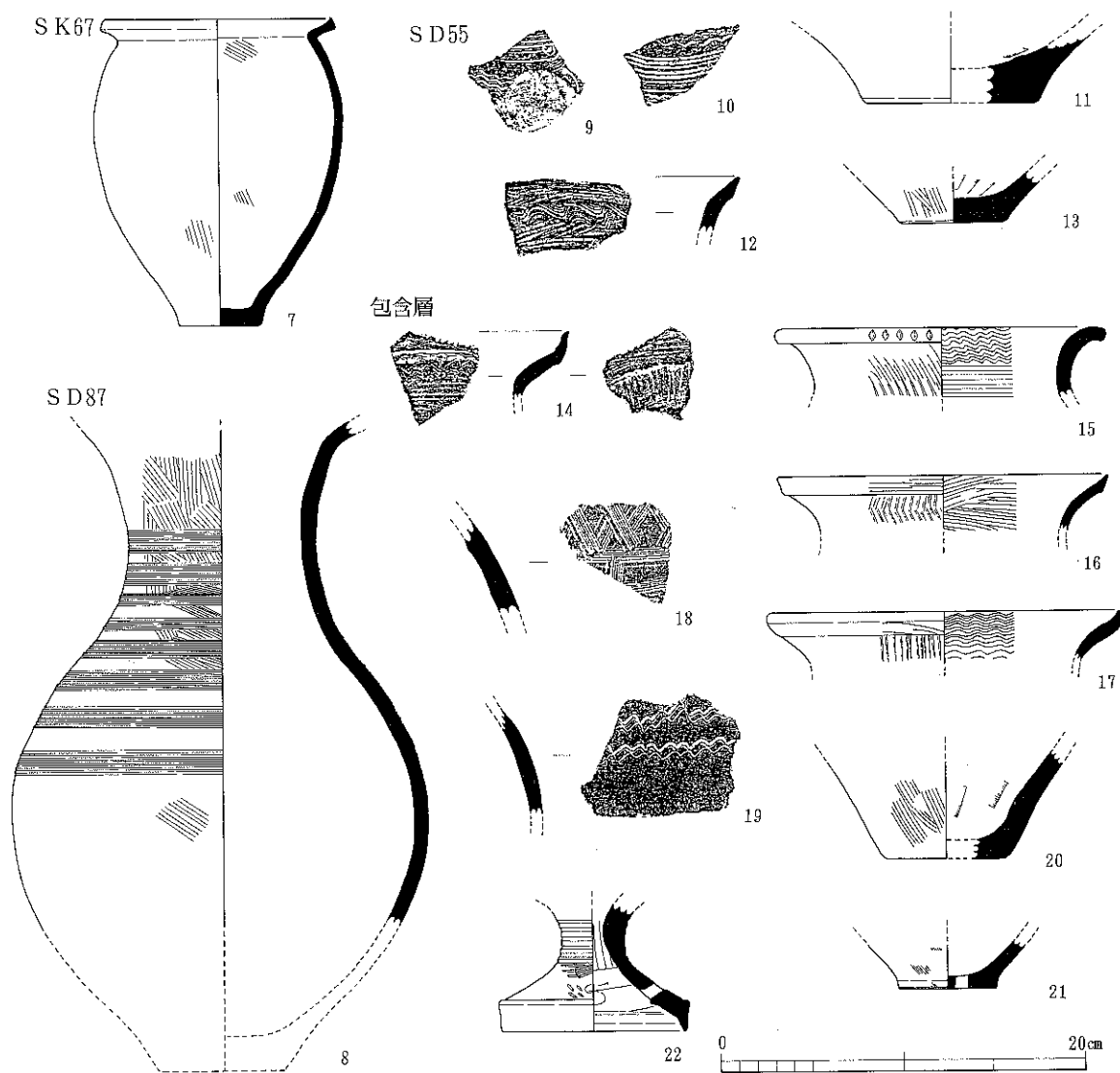
S B 03



S K 29



第19图 弥生土器实测图 1

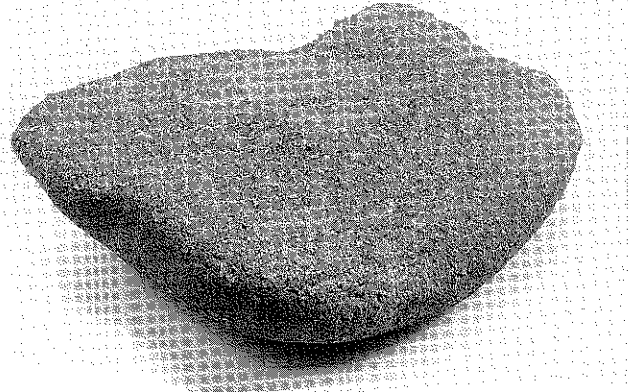


第20図 弥生土器実測図2

5は頸部より下半を欠く短脛広口壺である。口縁径20.0cmを測る。体部から頸部外面は、縦方向のヘラミガキの後、4条/帯の櫛描直線文が施される。内面は横ハケ。緩やかに外反する口縁部は、端部を外側へ折り曲げるように面をもたせる。端部下端には刻目が施される。

6は大和形甕である。器高28.5cm、口縁径20.8cmを測る。なだらかな肩部から中央部付近に張りもたせた体部に、緩やかに外反する口縁部をもつ。体部外面には何度も重複させた丁寧なハケが施され、内面には縦方向の強いナデの後、口縁部に粗い横ハケが施される。口縁端部は小さな面をもつ。また、端面上部の一部分のみに刻目が施されるが全周しない。使用痕跡を観察すると、煤は底部付近には付着していないため、そこまで土中に埋めて火に掛けたと考えられる。内面の焦げ付きは明瞭でない。いずれも第Ⅱ様式新相の所産と考えられる。

土壌S K67 小型の甕(7)がある。器高16.8cm、口縁径12.3cmを測る。倒卵形の体部に、いわゆるはね上げ口縁をもつ。度重なる使用によって摩耗が著しく外面調整はほとんど失われている。煤付着範囲は底部からほぼ全面に及ぶ。内面の痕跡は不明瞭。第Ⅲ様式新相。

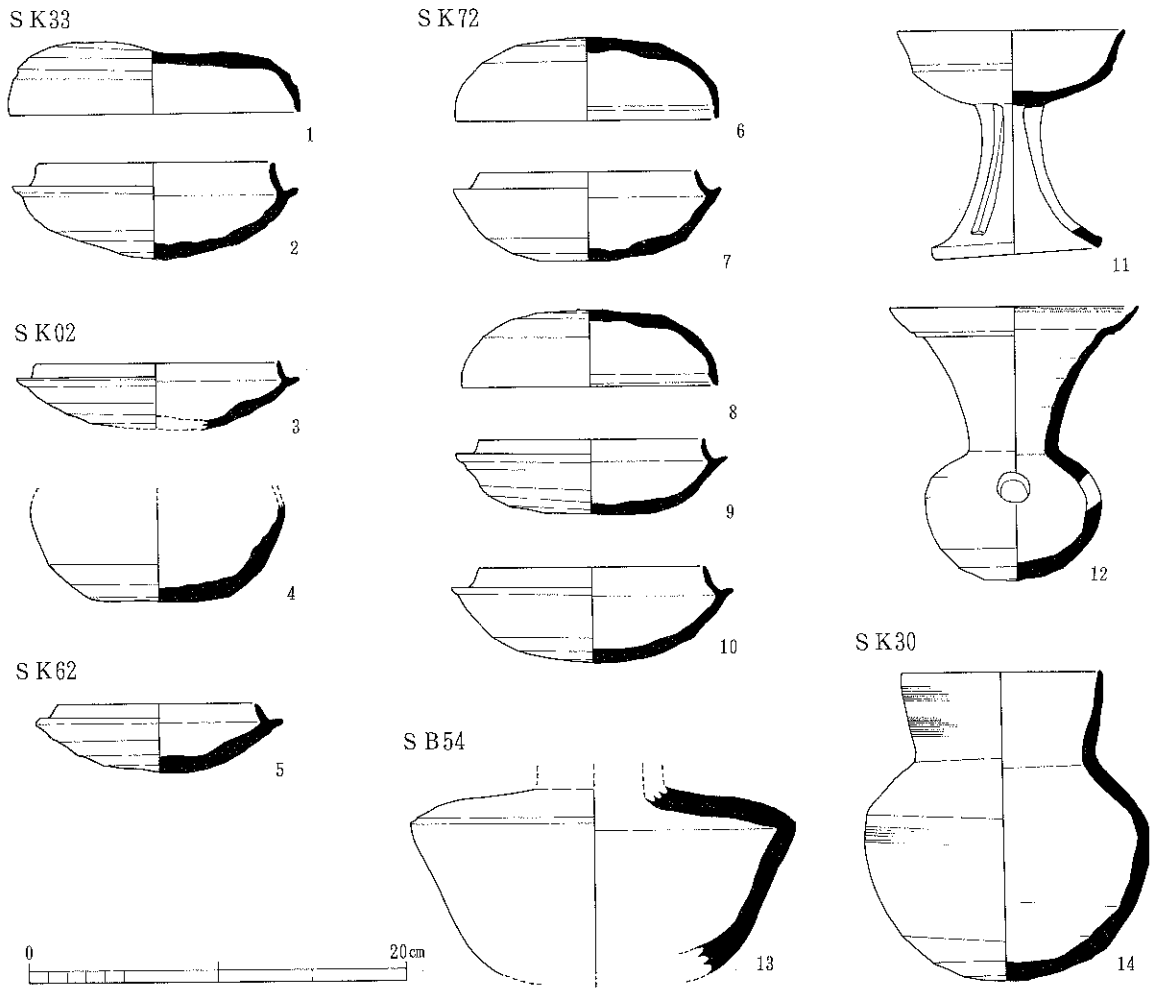


第21図 竪穴住居S B03出土石皿

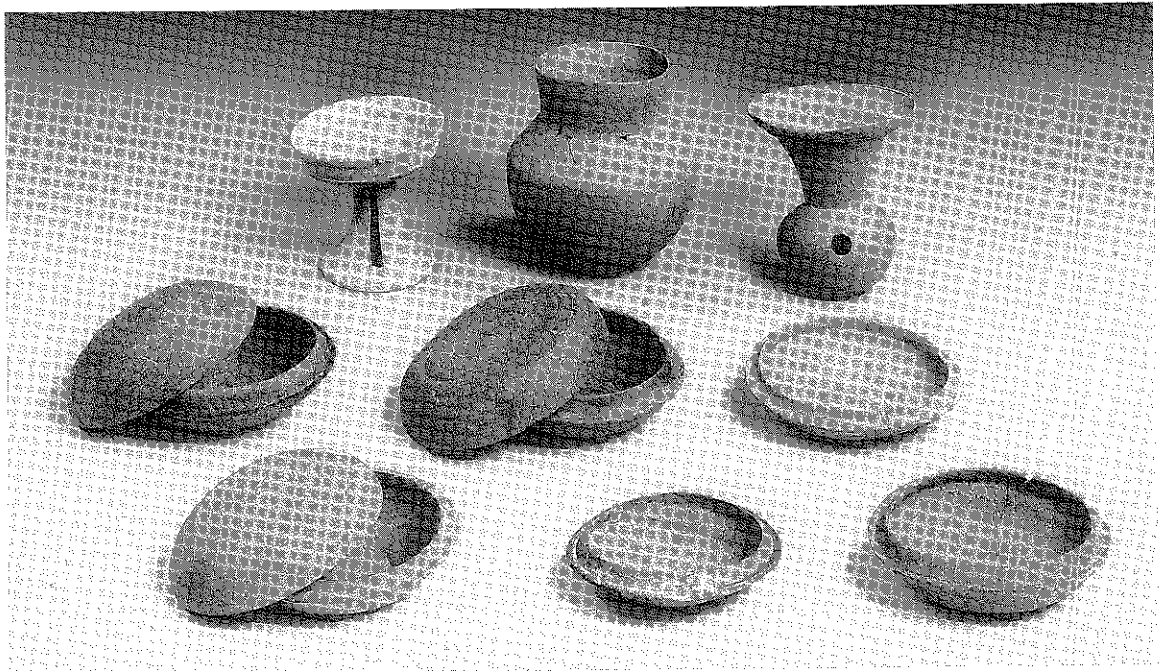
土壌S D87 広口長脛壺(8)がある。机上復元を行っている。外面にはハケ調整が行われ、頸部から体部上半部にかけて8帯の櫛描直線文が施される。6条/帯。内面はナデ調整。Ⅱ様式。

土壌S D55 どの個体も細片化していた。9・10は壺体部である。9は肩部に当たるものと思われ、外面には櫛描直線文と波状文の上から扇形文が施されている。内面は粗いハケ調整。10も肩部片と思われる。波状文と直線文が組合わされている。内面はハケ調整。11は平底の壺底部で、底面には木葉痕が残る。12は甕の口縁部で、山形口縁甕である。端部は内外面が強く横ナデされて上方へ大きくつまみ上げられており、受け口を指向している。外端面に粗い横ハケ、頸部外面に同様の縦ハケが施されている。内面には、ハケ原体による直線文・波状文を施した後、頸部より下に横ハケ調整が行われている。

包含層 壺(18・19・21・22)、甕(14~17・20)などの破片がある。14は山形口縁甕である。頸部外面は、粗い縦ハケの後に軽くナデられている。端面には横ハケの後、上部に刻目が施される。内面は、ハケ原体により口縁上方から直線文、波状文が施文された後、頸部以下のハケ調整が行われている。15は緩く外反する「く」の字形口縁甕である。頸部外面には浅く密な縦ハケ、端面に刻目が施される。内面には、口縁端際にハケ原体による波状文が施された後に頸部のハケ調整が行われている。16は端部が尖り気味につまみ上げられる近江形甕の口縁部である。外面端面には粗い横ハケ、頸部に縦ハケを施す。内面には長い横ハケを大きく重複させて施している。17も16とほぼ同様であるが、内面にはハケによる波状文が施される。18・19は壺体部最大径付近の破片で、18には直線文帯間に斜格文と縦描直線文が配されている。19に施されている2帯の波状文は施文帯の最下段と考えられ、波状文以下には横方向のヘラミガキが施されている。22は台付壺もしくは鉢の脚台部である。外面全体にはヘラミガキが施され、柱部には凹線文が施される。内面には、柱部に絞り痕が残り、脚部にヘラケズリが施されている。いずれも第Ⅱ様式から第Ⅳ様式の範疇に収まるものと考えられる。



第22图 須恵器実測図



第23图 須恵器集合写真

B. 古墳時代の遺物（第22・23図）

竪穴住居S B54 須恵器の壺、甕の破片が出土しているが、図化できるのは壺のみである。壺（13）は体部が残存する。陶邑MT21型式より古相を示し、7世紀後半に比定できる。

土壌墓S K30 完形で須恵器の直口壺（14）が1個体出土している。口径10.4cm高さ16.3cmを測る。口頸部はやや外反して上方に伸び、口縁端部は丸くおさめている。体部は肩部の張りが弱く、底部は丸みを帯びる。体部・口縁部にはカキメを施し、底部は回転ヘラケズリを施す。陶邑TK10型式に相当し6世紀中葉に比定できる。

土壌墓S K33 完形の須恵器の杯蓋と杯身が各1個体出土している。出土状態からセットで使用されたものと思われる。杯蓋（1）は口径15.0cmを測るもので、天井部外面は回転ヘラケズリを施し、天井部と口縁部の境に浅い凹線が巡る。杯身（2）は口径12.5cmを測る。底部は深く丸みを有し、外面は回転ヘラケズリを施す。また、内面には同心円の当て具痕が残る。陶邑TK10型式に相当する。

土壌墓S K72 須恵器の杯蓋が2個体、杯身が3個体、高杯、ハソウが各1個体出土している。6と7、8と9はセットで使用されていたと考えられる。杯蓋6は口径13.4cmを測る。天井部は丸みを有し、外面は回転ヘラケズリを施す。口縁内側に浅い凹線を巡らす。杯身7は口径11.2cmを測る。全体的に楕円形に歪んでいる。底部は深く丸みを持ち、外面は回転ヘラケズリを施す。杯蓋8は口径13.4cmを測る。天井部は丸みを有し、外面は回転ヘラケズリを施す。口縁内側は浅い凹線が巡る。杯身9は口径12.0cmを測る。底部は比較的平らに近く、外面は回転ヘラケズリを施す。杯身10は口径12.0cmを測る。底部は深く丸底で、外面は回転ヘラケズリを施す。

高杯（11）は口径12.0cm高さ11.8cmを測る。杯部口縁はなだらかに外上方に伸び、口縁と底部の境には浅く凹線が巡る。脚は長く1段三方透かしを穿つ。ハソウ（12）は口径13.0cm高さ11.5cmを測る。頸部は基部から外上方に伸び、端部近くで角度を変え上方に伸び、屈曲部に稜線をつくる。口縁内側に浅い凹線が巡る。肩部の張りは少なく、体部最大径は中位に求められる。円孔は径1.7cmで、体部やや上方に穿つ。陶邑TK10型式に相当し、6世紀中葉に比定できる。

土壌S K02 須恵器の杯身が2個体、壺の下半部が1個体出土している。杯身（3）は口径13.6cmを測る。底部は回転ヘラケズリを施す。壺（4）は体部中位から上を欠いており、この状態で使用された可能性がある。底部は平らで、外面はヘラケズリを施し、内面は回転ナデ調整を施す。陶邑TK209型式に相当し、6世紀後葉に比定できる。

土壌S K62 図化できるものとして須恵器の杯身（5）がある。口径10.0cmを測る。底部は回転ヘラケズリを施す。陶邑TK217型式に相当し、7世紀初頭に比定できる。

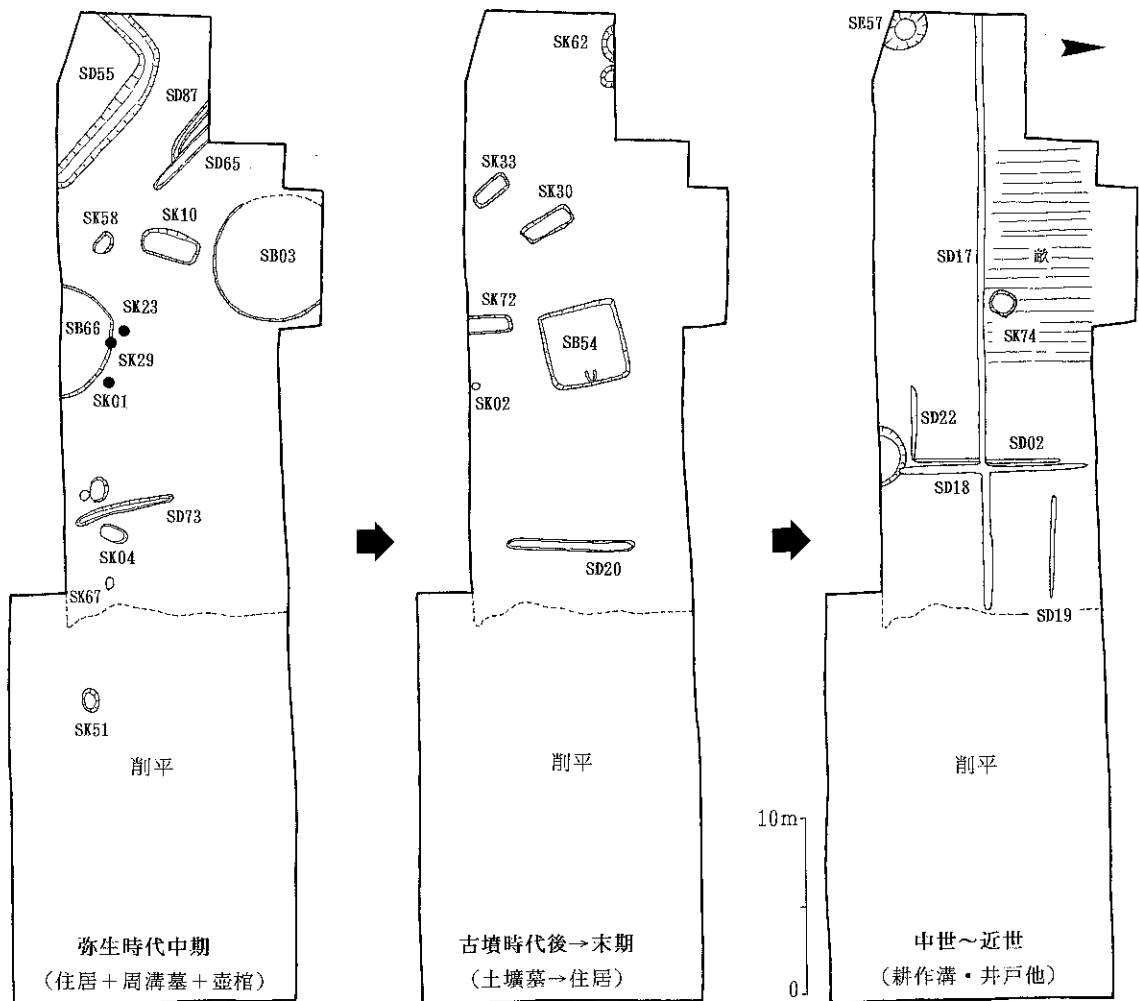
3. 遺構の変遷

以上、1次調査で検出された遺構・遺物の概要について報告してきた。ここでは、これらの時代的変遷を概括し、1次調査のまとめにかえたい。

弥生時代 今回、乙方遺跡で確認した弥生遺跡は、宇治川谷口部では平等院下層の塔の川遺跡に次ぐ2例目であり、数少ない当地の弥生遺跡に貴重な一例を加えることができた。

時代的には中期前葉から中期中葉にかけてのものであり、集落と墓地が遺構の主体である。土器に近江系のものが比較的含まれる点は、地理的に見て妥当な状況であろう。

遺構の時期を少し細かく見ると、竪穴住居は中期前葉に比定でき、壺棺や方形周溝墓は中期前葉から中期後葉にかけて比定ができる。この点を踏まえれば、集落から墓地への土地利用の変化を想定できる状況ではある。集落について、周囲の地形を見ながら推測すれば、集落範囲はさほどの広がりを持つとは考えられず、川岸部に営まれた小集落であるとみる評価



第24図 1次調査地の遺構変遷図

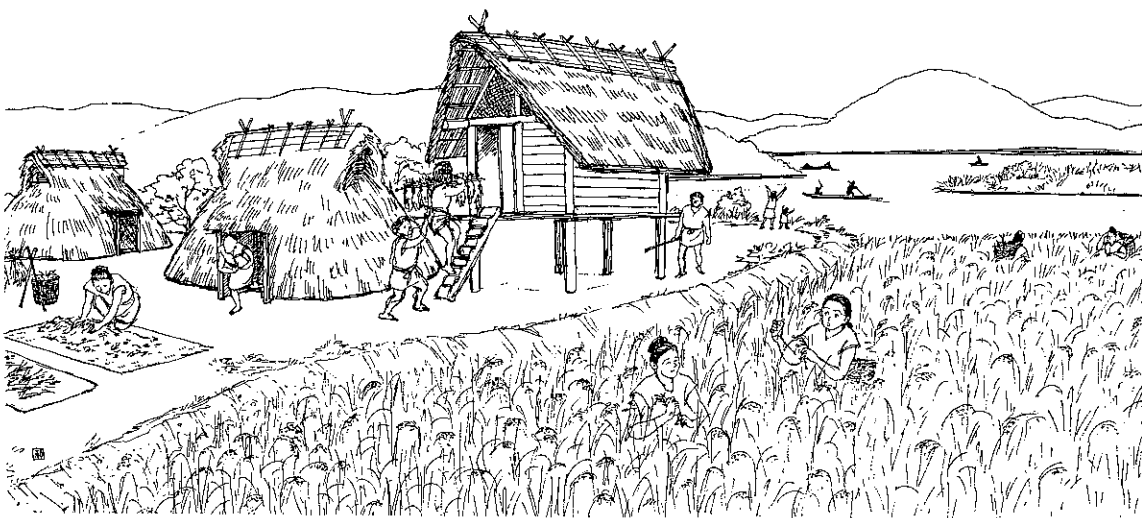
が穏当であろう。また、調査地の北にある谷地形には、弥生水田が展開している可能性も指摘できる。

古墳時代 弥生時代の後、当該地での土地利用が確認できるのは古墳時代後期であり、まずは墓地としての利用である。検出された土壌墓は、いずれも6世紀中葉ごろのものである。

当該期の首長墓ないし中心集落は、現在、調査地の北東500mにある門ノ前古墳であり菟道遺跡である。門ノ前古墳は6世紀中葉に築造された全長30mほどの前方後円墳で、宇治地域最後の首長墓である。門ノ前古墳周囲に展開する菟道遺跡では、古墳時代中期から奈良時代にかけての住居跡が見つかっている。これらの遺跡と今回検出した乙方遺跡の土壌墓群は、時間を共有している。問題として、この土壌墓群の時期において、当該地が墓地としてのみ利用されているのか否かがあるが、今回の発掘成果からは確定的な事を知るのは困難である。ただ、6世紀後半ごろと思われる竪穴住居S B54が営まれたり、7世紀初頭の遺物が散見されるのは、やはり散漫ながらも6世紀中葉以降、7世紀初頭にかけて住居が展開していた事を予想させる。

中世～近世 中世前半期の遺構が散見されるが、土地利用の有様は良くわからない。調査前、当該地は畑であったが、その淵源が中世後半に溯ることは、江戸の地割り溝SD17に先行する畝跡から理解される。中世期には、京阪宇治線東側を通る奈良街道ぞいに集落が展開し始めたと思われ、この集落の裏地として宇治川までの平地が畑地利用されたと推定できる。

このような中世での土地利用の状態は、江戸期へ基本的に受け継がれているとしてよく、宇治郷乙方の集落背後地の畑ないし茶畑として利用され現代に至っている。なお、江戸期では後述するように、当該地南側に乙方在住の瓦師によって瓦窯が設けられ、江戸末期まで瓦生産が行われるようになる。



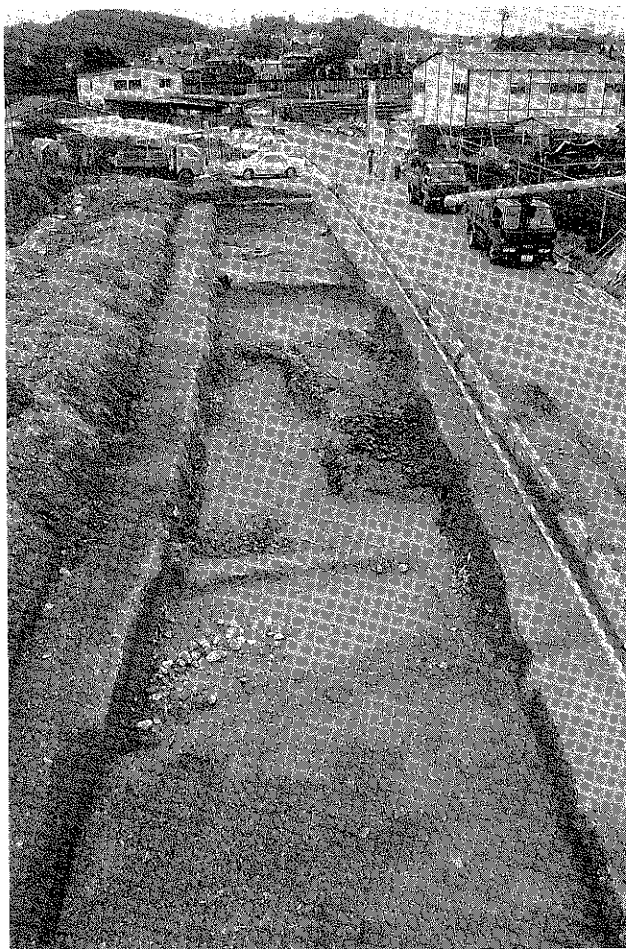
第25図 弥生時代乙方遺跡のイメージ図（杉本作画指導、早川和子画）

V. 2次調査の成果

2次調査地は1次調査地の南西にあたり、京阪宇治線にそった南北に細長い調査地区である。北側の南北に設定したA調査地と、南側に東西に設定したB調査地の2か所で発掘調査を実施した。2次A調査地と1次調査地とは50m程度しか離れておらず、地形的には同一の場所であり、近世以降の開墾による削平が及んでいる場所でもある。

2次調査で検出したものは、A調査地において見つかった江戸時代の瓦生産に伴う粘土採り土壌が主体である。年代的には18世紀前葉と考えられる。瓦窯自体は、調査地西隣の茶畑に存在する公算がたかい。宇治郷の瓦師、山田源左衛門の窯場である。なお、B調査地では近代の置き土直下で礫混じりの地山となり全く遺構を検出しなかったため、以下の報告はA調査地の状況に限定することとしたい。

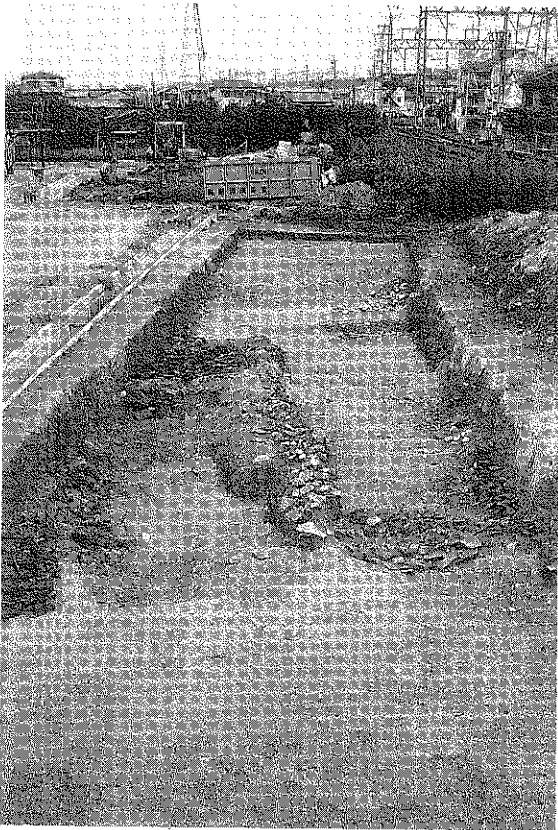
1. 検出遺構



第26図 A調査地全景（北から）

A調査地で検出した遺構は、土壌、溝、柱跡等であり、主に江戸時代のものである。調査地の南半部で検出した遺構は、埋土が褐色化し古様を感じさせるものが若干存在したが、大半は近代以降の耕作に伴うものである。中心となる遺構は、前述したとおり、調査地の北半部で見つかった粘土採り土壌であり、耕作土下に存在する黄灰色粘土質の地山を基盤とする遺構である。なお、この地山の広がりには粘土採り土壌周囲のみであり、他は礫混じりの地山となる。また、粘土採り土壌底面も礫混じりの地山である。

土壌SK01 東西2m以上、南北4.5m、深さ20cmの長方形土壌。土壌内から瓦片、窯壁体破片、灯明皿、国産磁器、瓦質火鉢などが出土した。粘土採り土壌であり、瓦捨て場として利用されている。



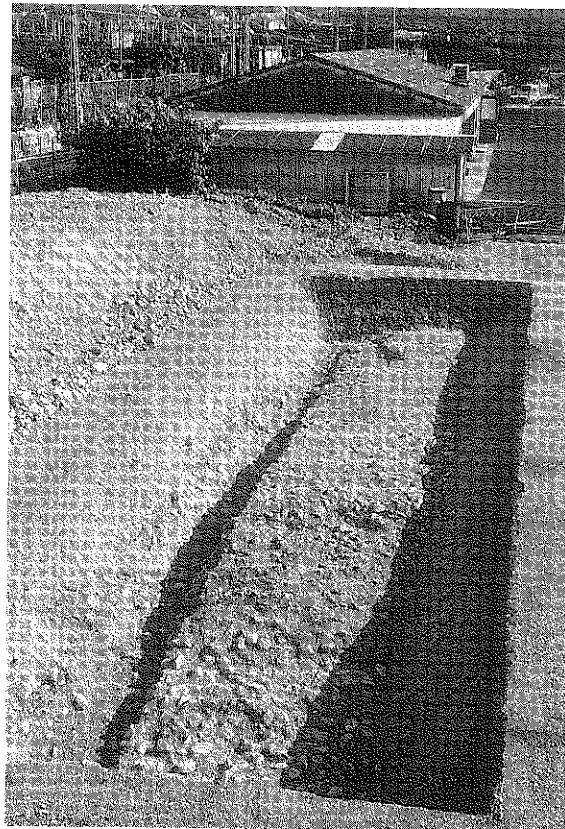
第27図 A調査地北半部（南から）



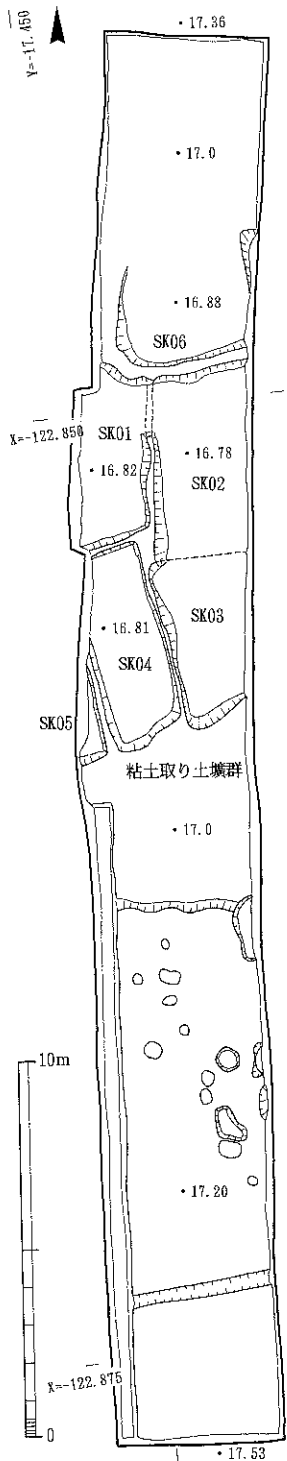
第28図 A調査地瓦出土状況（南から）



第29図 A調査地完掘状況（北から）



第30図 B調査地全景（北から）



第31図 A調査地平面図

土壌SK02 東西2.5m以上、南北4.8m、深さ25cmの長方形土壌。土壌内から瓦片、灯明皿などが出土した。粘土採り土壌であり、後に瓦捨て場として利用されている。

土壌SK03 東西2.5m以上、南北4.5m、深さ25cmの長方形土壌。土壌内から瓦片、灯明皿などが出土した。粘土採り土壌であり、後に瓦捨て場として利用されている。

土壌SK04 東西2.1m、南北5.2m、深さ20cmの長方形土壌。土壌内から瓦片、窯壁体破片などが出土した。粘土採り土壌であり、後に瓦捨て場として利用されている。

土壌SK05 調査地西壁ぞいで見つかった土壌。規模不明。土壌内から瓦片、窯壁体破片、窯詰道具、国産磁器、瓦質火鉢などが出土した。粘土採り土壌であり、後に瓦捨て場として利用されている。

土壌SK06 東西3.5m以上、南北2.5m、深さ30cmの長方形土壌。土壌内から瓦片が少量出土した。粘土採り土壌である。

2. 出土遺物

A調査地からは江戸時代の瓦類が整理箱30箱程度、国産陶磁器、瓦質土器、カワラケなどが整理箱1箱程度出土している。粘土採り土壌からの出土が大半であり、若干数表土層のものを含む。

A. 瓦類

瓦の種類には、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、鬼瓦、留蓋、菊丸瓦、塀瓦、瓦磚、瓦製窯詰道具が認められる。この中で最も出土量が多かったものは棧瓦の破片であり、全体の70%程度を占めていた。棧瓦・平瓦についてはサンプル採集とした。なお、第32図の瓦当文様は現用例を基に復元したものである。

軒丸瓦 軒丸瓦はNM I～IV (第32・33図) の4種類11個体がある。I～IIIは左巻き三巴文の周囲に珠文を巡らすものである。IVは「寶□禪院」の文字を主文とするもので、出土個体で判読できなかった欠字は、黄蘗山萬福寺の現用例から「藏」であることがわかる。したがって瓦当の文字は「寶藏禪院」となり、萬福寺子院宝蔵院用の瓦であることが理解できる。

I・IIIは主に表土内採集、IIはS K05、IVはS K01・05より出土している。I～IIIは平等院の他、市内の萬福寺・専修院でも現用が確認できる。

軒平瓦 軒平瓦は大きくNH I～III（第32・33図）の3種類7個体がある。Iは菱形を三つ集めた中心飾の左右に2転する雲形唐草文をもつものである。表面採集されたもので、寛文十年(1670)の平等院鳳凰堂の修理に使用されたものと同範である。

IIは五葉桐文の中心飾の左右に雲形唐草文と子葉をもつもので、子葉の先端が分かれるII aと分かれぬII bとに細分できる。また、外縁下部に格狭間状のくりをもつ。II aは表土内、II bはS K01から出土。

IIIはIIと同様に五葉桐文の中心飾の左右に雲形唐草文と子葉をもつもので、子葉の先端が分かれるIII aと分かれぬIII bとに細分できる。外縁の格狭間状のくりはない。III aはS K01から、III bは表土から出土している。

IIは市内の平等院・興聖寺・専修院・願行寺や京都市の醍醐寺で、IIIは平等院・興聖寺・三室戸寺などで現用されている。

軒棧瓦 軒棧瓦は大きくNS I・II（第32・33図）の2種類15個体がある。Iは平部瓦当の文様が先が分かれる子葉が向き合う中心飾の左右に、唐草文と中心飾と似る子葉をもつもので、小丸の文様によって、右巻き三巴文のI aと十二葉菊花文のI bとに分かれる。I aが通常形でI bは特例であることが萬福寺・平等院他での現用例から理解できる。発掘では確認できていないが、もともと小丸を付けず平部瓦当だけの鎌形軒棧瓦がIにあることも、平等院での現用例から理解できる。

IIの平部瓦当の文様構成はIと基本的には同じであるが、唐草文を2転にしたことで文様の各単位が縮小している。小丸は左巻き三巴文で、巴尾に大きな范傷をもつ。平等院で現用が確認できる。

I aはS K01～03・05から、I bはS K05から、IIはS K03から出土している。

丸瓦 丸瓦の出土量は数点である。全形が理解できるS K01出土例を第35図に図示しておく。玉縁をもち、外面は縦磨き、内面には鉄線によるコビキ痕と筵状編み物の上に布を張った布筒痕そして細い板状工具での内叩きが認められる。

平瓦 平瓦と棧瓦は破片化した時に分別が困難であるため正確には把握できないが、平瓦と確定できる破片は少ない。平瓦は整形後の調整の粗密によってH IとH IIとに分けることができる。

H I（第35図-2）は凹面を横方向の磨き、凸面を未調整とするもので、凸面の縁には凹形調整台の痕跡を残す。H II（第35図-3）は凹面を丁寧な磨き、凸面の縁周囲も丁寧な磨き、端面も丁寧に磨くもので、Iと比べてやや厚い。またH IIの端面には「宇治源左衛門□」の刻印

があり、宇治郷の瓦師である山田源左衛門の作瓦であることがわかる。

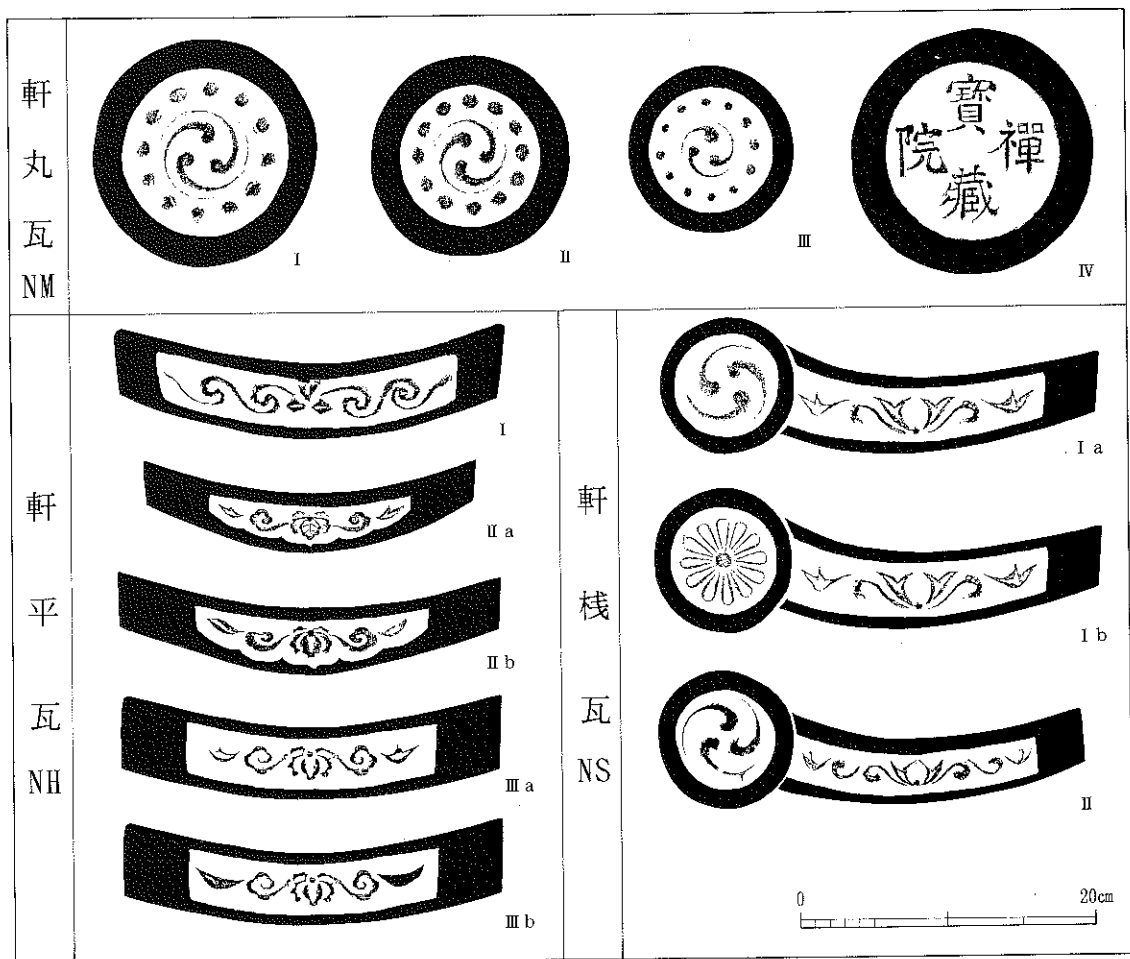
江戸期の瓦には「並」や「上磨」などの商品等級があり、Ⅰを並、Ⅱを上磨に比定することも可能である。

棧瓦 全体が復元できた棧瓦を第35図-4に図示した。向かい合う隅を切り欠くもので、現在の棧瓦と基本的に同じである。平部凸面は横方向の磨き、棧部は縦磨きで、凹面には調整台の痕跡を残す。棧瓦の中には、平瓦のような商品等級を思わせる調整上の差はない。また、端面には「○」や「○」に「へ」の刻印（第34図）が少数確認できる。ただこの刻印が確認された破片の中には、平瓦ⅡⅠが含まれる可能性も否定できない。

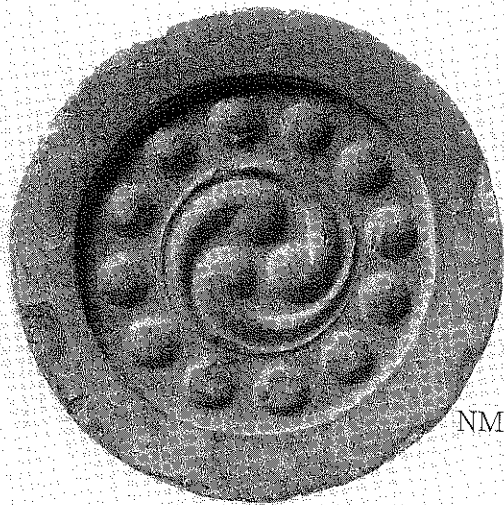
鬼瓦 雲形の文様をもつ鬼瓦の足破片（第37図-8）が表土層より出土している。

留蓋 留蓋がS K 03（第37図-6）から出土している。表面に「乃角」と大きくへら書きされている。留蓋のこのような表記は使用位置を示すものであり、左か右の文字が文頭にくる。

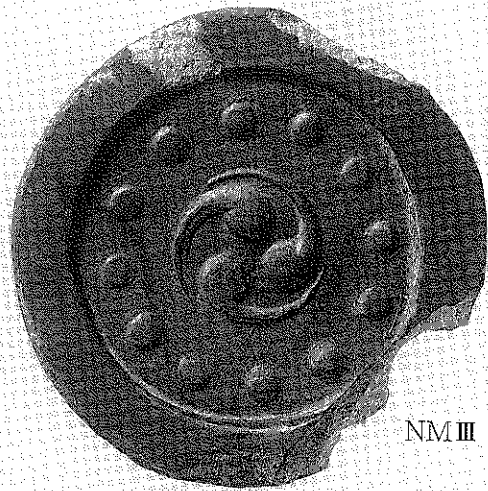
菊丸瓦 飾り棟の装飾に用いる菊丸瓦（第36図・第37図-7）が15個体出土している。すべて同范。興聖寺・専修院・宇治神社で現用が確認できる。S K 01・03・05から出土。



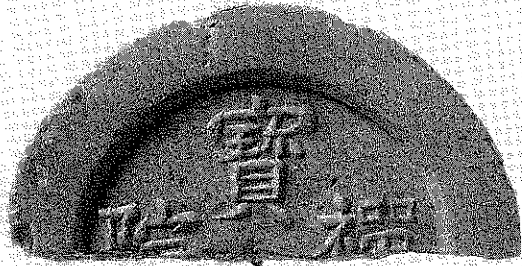
第32図 軒瓦・軒棧瓦型式一覧



NM II



NM III



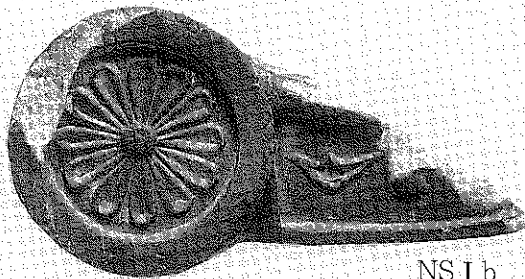
NM IV



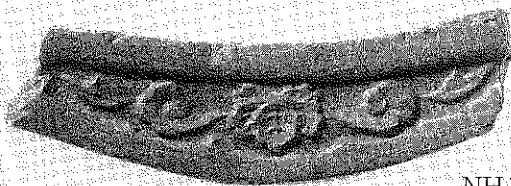
NS I a



NH I



NS I b



NH II a



NS I

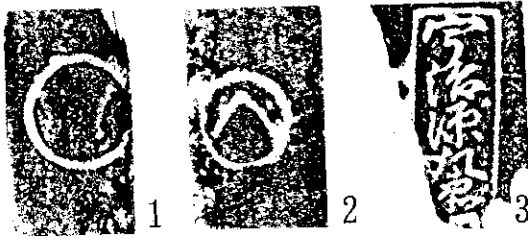


NH III a



NS II

第33图 出土遺物写真 1



第34図 刻印拓本(1:1)

塀瓦 図示しなかったが、湾曲のない平板な塀瓦が少量であるが出土している。

瓦磚 五角形の瓦磚(第35図-5)が表土から出土している。厚さから見て敷磚と思われる。江戸期において瓦磚が使用されるのは、古代に創建された寺院もしくは禅宗寺院である。現在、

付近の寺院で瓦磚が用いられているのは、黄檗宗萬福寺と曹洞宗興聖寺である。

瓦製窯詰道具 「ト」字形をした瓦製品(第37図-9)がSK01より2個体出土している。瓦の窯詰め時に、瓦どうしを密着させず一定の隙間を設けるために用いられた窯詰道具であり、民俗例では「チキリ」と呼ばれるものである。

B. 土器・陶磁器類

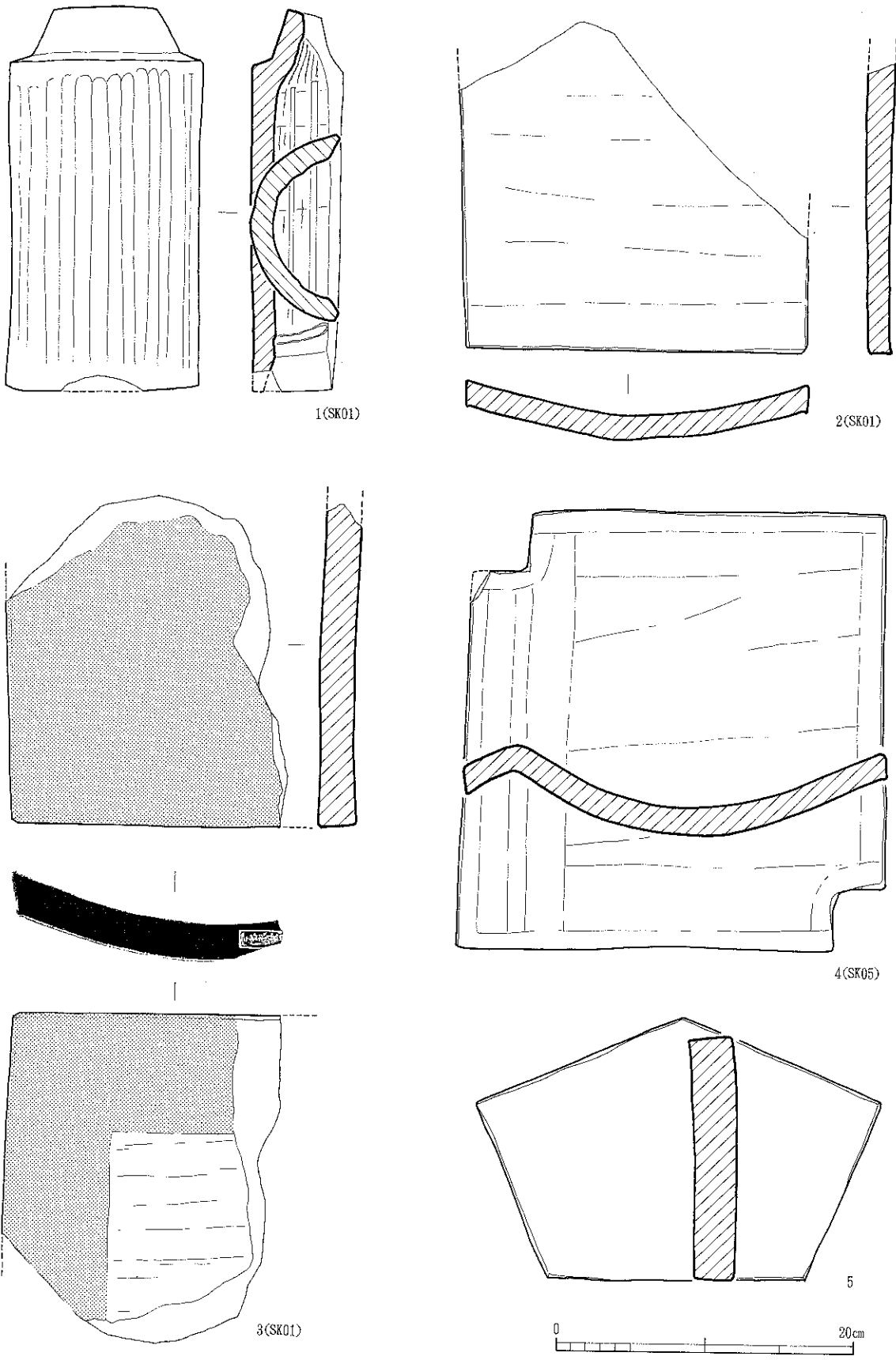
土器は江戸期の土器・陶磁器類が整理箱2箱程度出土している。第37図に図示したものは、遺構出土の土器・陶磁器類の主要品である。以下に遺構別の土器・陶磁器類の概要を報告する。

土壇SK01 SK01からは近世陶磁器・瓦質土器が出土している。10は白磁皿、11と12は灰オリーブ系釉調の磁器皿、13は明緑色釉調の磁器碗である。いずれも国産磁器と思われ、10は伊万里系の可能性が高い。14は口縁直径27cmほどを測る瓦質の鉢形土器で、火鉢ないし火桶と考えられる。高台の三方に半円形の抉りを入れている。体部外面は上半が縦磨き、下半はナデ、体部内面および内底面に密にヘラによる条痕を施している。この他に、陶器の皿片や信楽焼のすり鉢破片が出土している。

土壇SK03 SK03からは近世陶磁器・瓦質土器・土師器灯明皿が出土している。17は染め付けの皿で伊万里と思われる。18は灯明皿の陶器製受け皿で、内面に灯明皿を支える突起が付く。19は体部上半が褐釉、下半が透明釉の信楽焼の磁器質の四耳壺で、いわゆる「腰白」と呼ばれる茶壺である。市内の伝統的な茶屋にも数多くが残されており、宇治地域ではよく出土する陶器である。15は瓦質の鉢形土器で、火鉢ないし火桶と考えられる。底部に脚を付す。おそらく三脚。体部外面は削りの後にナデ調整。体部外面に「源」、外底部に「二月」のヘラ書きがある。16は土師器の灯明皿で、いわゆるカワラケである。内面見込みに沈線をもつ。江戸前半期の当地域では、カワラケは灯明皿としての利用に限定されてきている。

土壇SK04 SK04からは近世陶磁器片・土師器の灯明皿が出土している。20~23はいずれも灯明皿で、内面見込みに沈線をもつ。

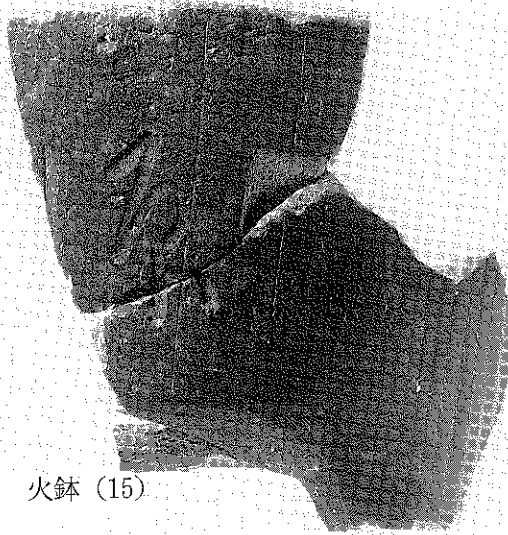
土壇SK05 SK05からは近世陶磁器片・土師器が出土している。24・25は灯明皿で内面見込みに沈線をもつ。26は土師質の焙烙である。



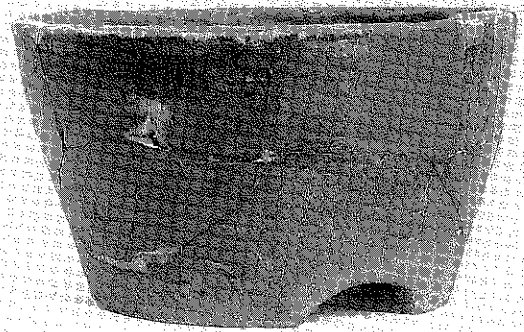
第35图 出土遺物実測図 1



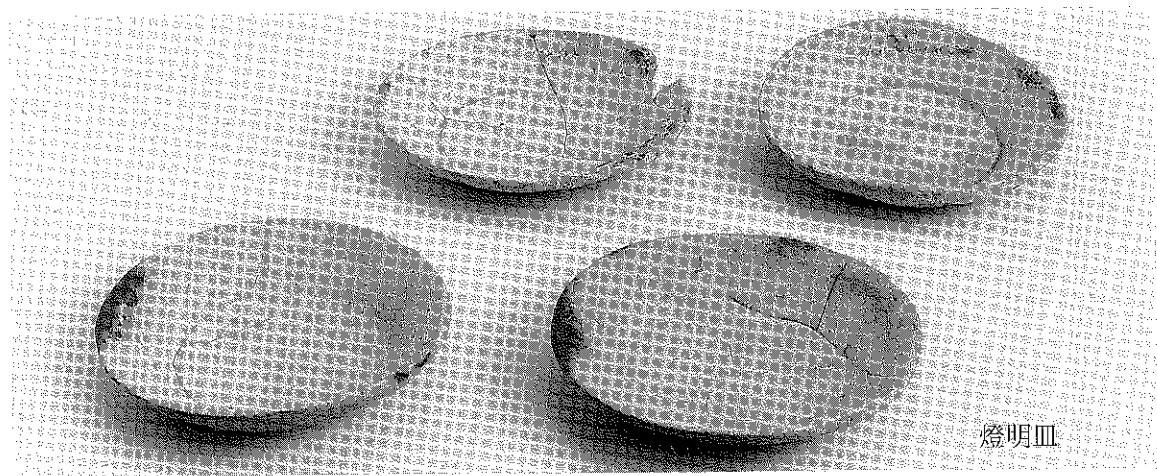
菊丸



火鉢 (15)

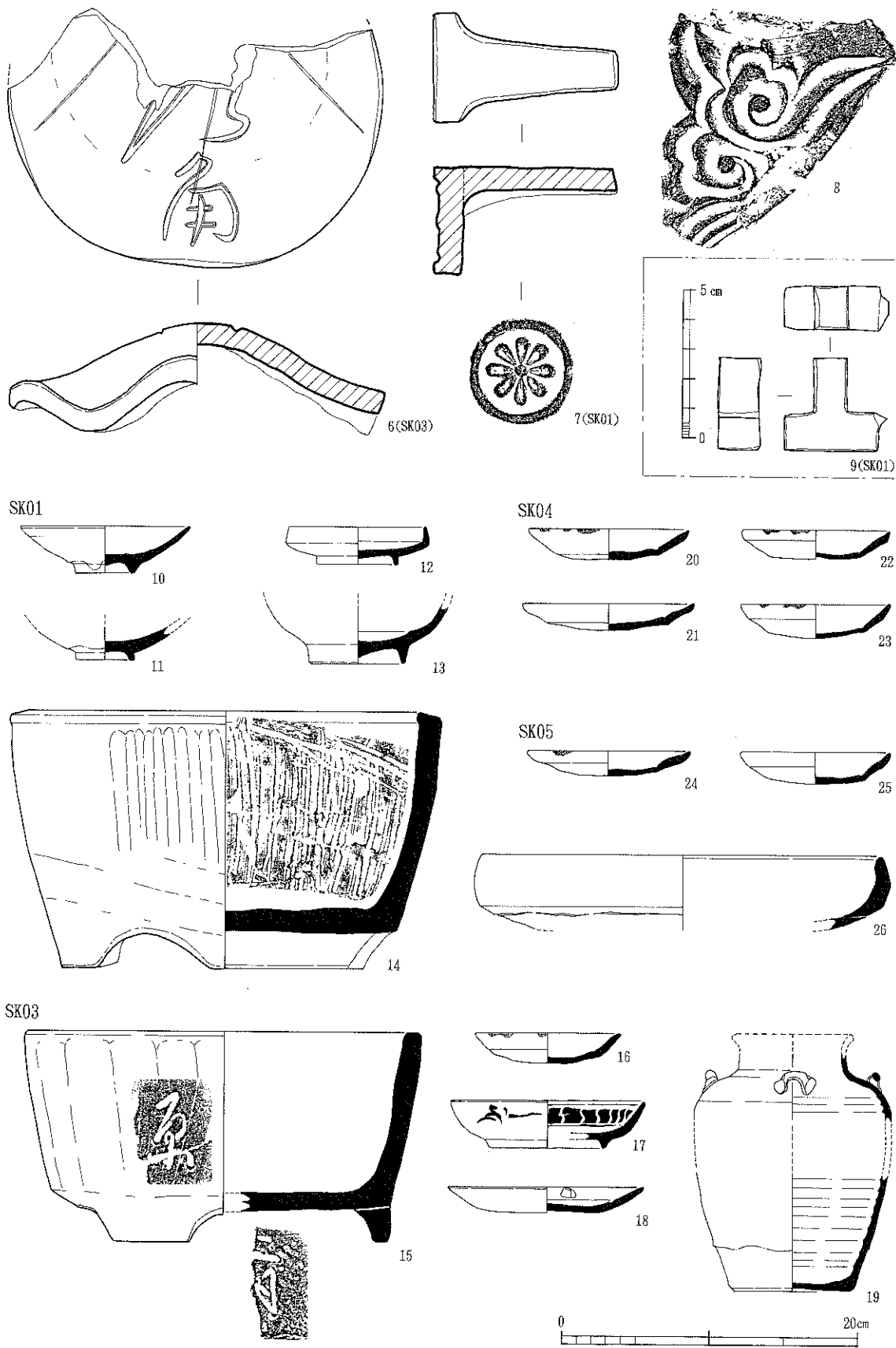


火鉢 (14)



燈明皿

第36図 出土遺物写真2



第37图 出土遺物実測図 2

3. 宇治郷の近世瓦師と山田源左衛門

2次調査で発掘されたのは、遺構的には粘土採り土壌群であり、遺物的には近世瓦を主体としたものであった。また、粘土採り土壌群の中に遺棄された瓦の状態や、窯詰道具・窯壁片の出土は、この調査地の至近のなかに瓦窯が存在していることを示しており、地表観察からは調査地の西隣に瓦窯跡が想定できることを述べてきた。この遺跡が江戸期を通じて宇治の在郷瓦師として生産活動を行った山田源左衛門の窯場であることは、「宇治源左衛門」の刻印から明らかである。以下に、気付いた点を整理しまとめにかえたい。

宇治郷の瓦師 近世の宇治郷では二軒の瓦師が生産活動を行っていたことが知られる。乙方在住の山田源左衛門と藤田市兵衛である。山田源左衛門の活動は、中尾正治氏の鬼瓦銘の追跡研究（「八幡近郊と南山城地域で名を残した瓦師」『京都考古』69号、1993）によって比較的確認できており、その成果に追加資料を加え作成したのが表1である。これからも理解できるように、1670年の鳳凰堂修理に登場するのを皮切りに、19世紀中頃までの活動を知ることができる。供給地は宇治周辺を主体としながらも、特に18世紀代では京都市上京や枚方へもその活動を広げている。南山城地方の近世瓦師を代表する一人である。

出土瓦の年代 今回検出した粘土採り土壌群内に遺棄された瓦が、ほぼ同時期の中にあることは、各土壌内より出土する軒瓦・軒棧瓦・菊丸瓦の状況から推測がつく。まず、表1に記載された寺院での軒瓦の現用状況を基にその年代を考えてみたい。

軒平瓦NHⅡ・Ⅲの状況を見ると、元禄十五年（1702）銘の鬼瓦がある興聖寺僧堂、正徳元年（1711）銘の鬼瓦がある願行寺表門、正徳二年（1712）銘の鬼瓦がある専修院表門に数多く現用されており、特に専修院では軒丸瓦NMⅠ・Ⅱとの組み合わせも認められる。次いで軒丸瓦NMⅣの「寶藏禪院」銘は黄檗宗総本山萬福寺で「萬福禪寺」銘瓦と混用されてい



第38図 養林庵鬼瓦銘拓本

るが、これは明らかにかつて宝藏院に使われていたものの転用である。萬福寺塔頭の宝藏院は、大蔵経を開刻した鉄眼からはじまり寛文十一年（1671）の創立であるが、正徳五年（1715）に大きく修復されていることが記録に見える。すなわち、これらの瓦の現用状況を見ると、概ね18世紀前半期の建物に使われており、かつ「寶藏禪院」銘の存在を踏まえれば、出土瓦群の年代は正徳五年頃にもとめることが適当であることとなる。

No.	年号	西暦	所在地	寺・神社名	建 物	No.	年号	西暦	所在地	寺・神社名	建 物
1	寛文10	1670	宇治市	平等院	鳳凰堂	22	寛延 3	1750	宇治市	橋寺	本堂
2	延宝 4	1676	宇治市	宇治社御旅所	本殿	23	宝暦 3	1753	久御山町	安養寺	本堂
3	延宝 5	1677	宇治市	恵心院	本堂	24	同 上		宇治市	宇治上神社	社務所
4	元禄 6	1693	宇治市	萬福寺	総門	25	宝暦 7	1757	宇治市	願行寺	本堂
5	元禄 7	1694	宇治市	萬福寺天真院	表門	26	明和 6	1769	宇治市	萬福寺宝善院	本堂
6	元禄15	1702	宇治市	興聖寺	僧堂	27	明和 7	1770	伏見区	醍醐寺三宝院	護摩堂
7	同 上		大山崎町	宝積寺	本堂	28	明和 8	1771	伏見区	醍醐寺	五重塔
8	宝永 2	1705		光徳寺	客殿	29	安永 7	1778	伏見区	醍醐寺三宝院	玄関
			八幡市	(現正法寺)	(小方丈)	30	安永 9	1780	左京区	見性寺	表門
9	正徳 1	1711		萬福寺真光院	門	31	文化 8	1811	宇治市	正覚院	不動堂
			宇治市	(現願行寺)	(表門)	32	文化11	1814	久御山町	光福寺	表門
10	同 上		伏見区	醍醐寺理性院	本堂	33	天保 5	1834	宇治市	巨椋神社	拜殿
11	正徳 2	1712	宇治市	専修院	表門	34	天保 7	1836	宇治市	萬福寺緑樹院	本堂
12	享保 4	1719	枚方市	久修園院	本堂	35	無紀年	—	宇治市	平等院	観音堂
13	同 上		宇治市	三室戸寺	本堂	36	無紀年	—	宇治市	最勝院	不動堂
14	享保 9	1724	宇治市	萬福寺万松院	天光塔	37	無紀年	—	宇治市	萬福寺龍興院	本堂
15	享保13	1728	宇治市	西導寺	本堂	38	無紀年	—	宇治市	宇治神社	拜殿
16	享保16	1731	宇治市	浄土院	養林庵	39	無紀年	—	久御山町	若宮神社	拜殿
17	享保18	1733	八幡市	正法寺	本堂	40	無紀年	—	八幡市	狩野神社	拜殿
18	寛保 4	1744	久御山町	浄安寺	本堂	41	無紀年	—	八幡市	八角堂	—
19	延享 2	1745	上京区	立本寺	本堂	42	無紀年	—	京田辺市	西光寺	門
20	延享 4	1747	宇治市	三室戸寺	阿弥陀堂	43	無紀年	—	左京区	善教院	表門
21	寛延 3	1750	宇治市	興聖寺	開山堂	44	無紀年	—	伏見区	醍醐寺三宝院	唐門

表1 山田源左衛門銘瓦・棟札所在一覧

棧瓦の生産 今回の出土瓦の全般的な特色としては、まず多種類の瓦が認められる点がある。また、平瓦での並と上磨の商品等級を推定できる資料の存在、ここで生産されたと推定できる「源」銘瓦質火鉢などは、近世の瓦生産の実態を知る上で有益な資料だと考える。最後に、出土瓦の中で圧倒的な割合を占めた棧瓦について、少し問題提起をしておきたい。

棧瓦の出現については、京都市深草瓦町善福寺の西村氏「由緒覚書」に記載された西村半兵衛による延宝二年（1674）説が良く知られている。また棧瓦が広まるきっかけとなったのは、江戸で享保五年（1720）に出された「軽き瓦」奨励策である、というのが一般的理解である。京都での瓦葺き奨励は、享保十五年（1730）の西陣焼け後の触れに見ることができる。すなわち、棧瓦は17世紀後半に出現したが、その普及は18世紀前半に出された都市防火のための町屋の瓦葺奨励策以後である、という理解が通説となっている。ただ、この奨励策が直ちに広範な棧瓦普及をもたらしたというのは、江戸でも京都でも疑問が多く、京都の場合、町屋の棧瓦を主体とした瓦葺き普及は、天明大火（1788）以後のこととされる。しかし、今回の発掘で明らかとなった山田源左衛門の瓦工房では、先に述べた通り町屋の瓦葺奨励策以前に棧瓦を積極的に生産している。これは、棧瓦の普及に関しての通説的理解だけでは説明が困難な状況であり、具体事実に即した多面的な検討が必要である事を示していよう。

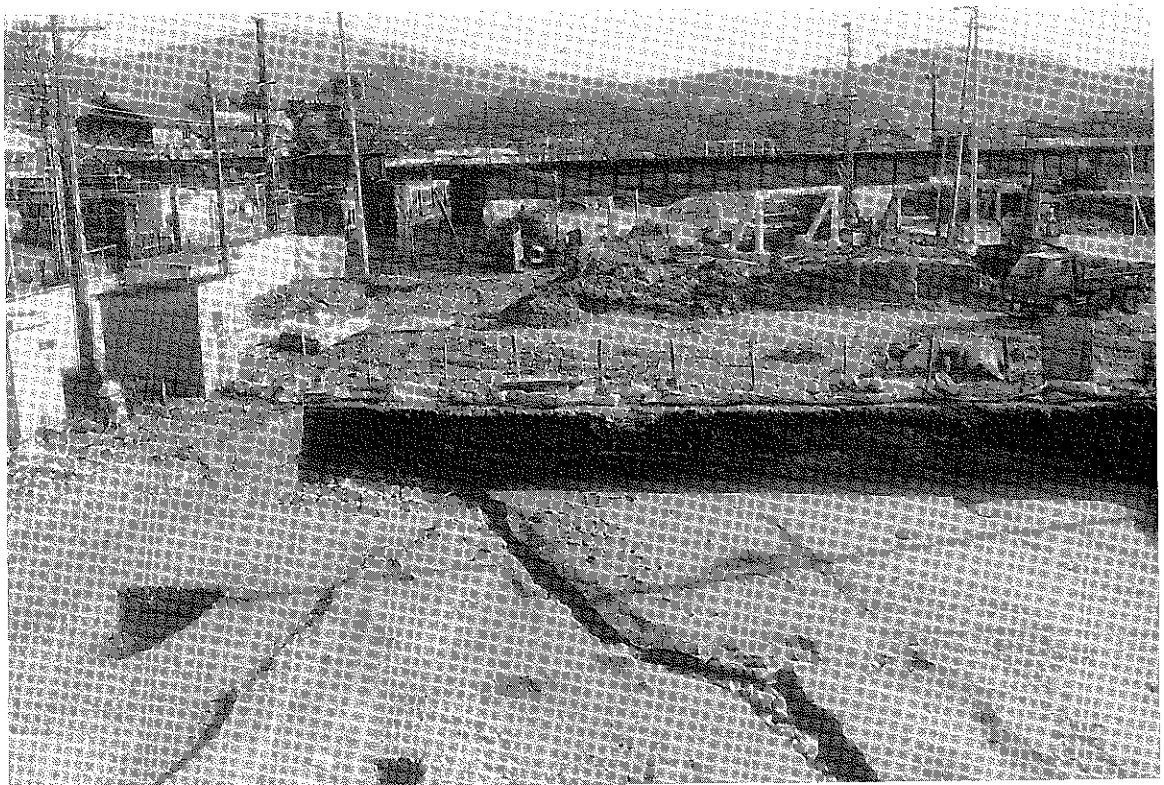
VI. 3 次 調 査 の 成 果

3次調査地は2次調査地の南の宇治京阪タクシー社屋が建てられていた場所であり、社屋の撤去後に発掘調査を実施した。調査地のすぐ南にはJR奈良線宇治川橋梁が、また東には京阪宇治線が通り、全体的に近代以降の土地改変が著しい場所である。

調査の概要 調査は、まず重機で表土を除去することから始めた。宇治京阪タクシー社屋建設時の盛り土を除去すると、レンガ工場跡と思われるレンガ片を多量に含む明治期の盛り土が発見され、その下層にトレンチ東部で江戸期・明治期の遺構が地山上（標高16.5m程度）で、西部は一段低くなり江戸期の水田（標高15.5m程度）が検出された。

調査は、地山と水田との境界斜面の石垣を検出しつつ、さらに水田の北半分を掘削したところ、下層50cmのところでもう一面の水田面を検出した。この下層水田も江戸期のものである。上・下水田面には、足跡が部分的に残されていた。石垣は前後に重複して新古の2時期があり、いずれも人頭大から長さ50cm大の河原石を乱石積にしたものである。石垣は新古とも下層水田に伴うもので、上層水田は新石垣を利用している。

トレンチ北壁ぞいでさらに下層の状況を確認するため断ち割りを始めたが、標高14.3m地点でも湿潤な堆積土が続き、湧水が激しくなったため掘削を取り止めた。



第39図 調査地の状況（北から）

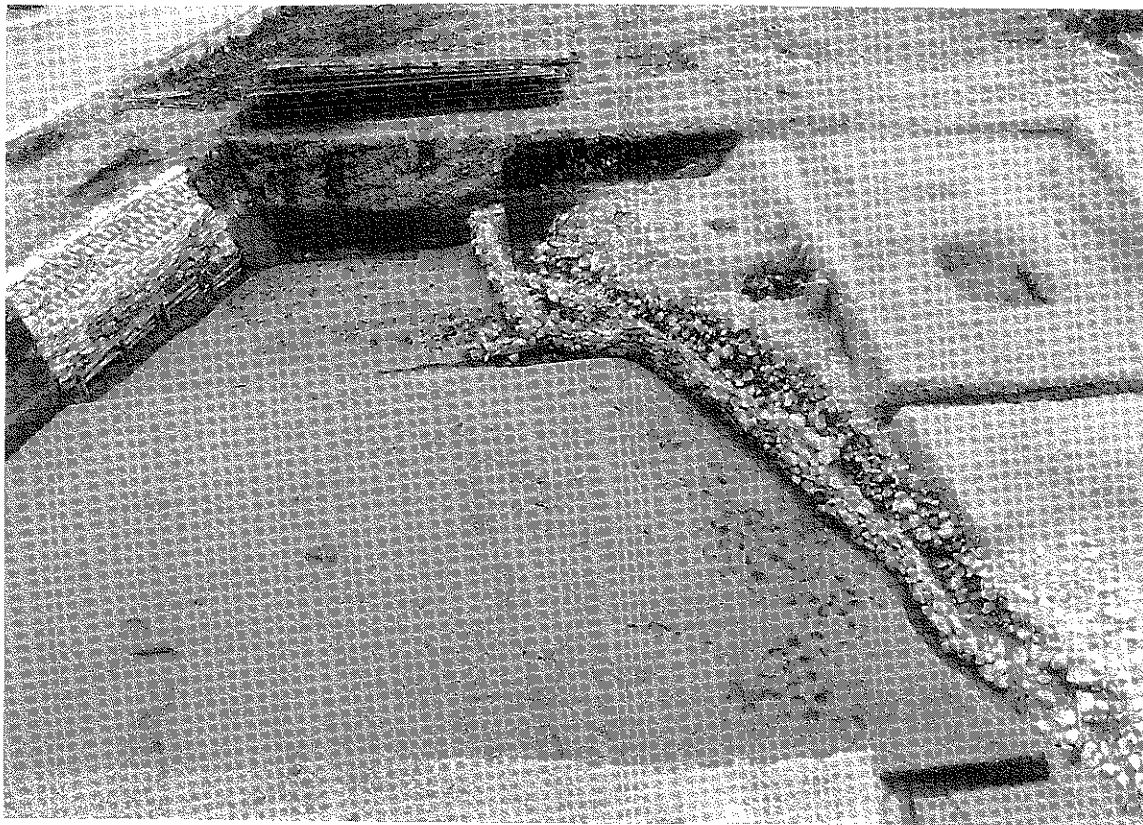
出土遺物は、地山上の掘り込みないし石垣の裏込めから棧瓦・近世陶磁器の破片が整理箱10箱程度出土した。いずれも江戸時代後半以降の年代に比定できるものである。



第40図 JR橋梁下出土瓦

また、調査地の南のJR奈良線宇治川橋梁部の宇治川堤防工事の際、地下3mの地点で江戸後期の瓦・灰層の堆積を確認した。出土瓦は第40図に示した棧瓦などである。

まとめ 3次調査地では、前述したごとく調査地東部で地山、西部は一段下がって江戸期の水田を検出した。この地山と水田を分ける石垣積みの崖面は、かつての宇治川右岸の河岸段丘崖と判断できる。すなわち、第4図に示される1次調査地西側を走る標高16mの河岸段丘崖の延長として把握できるものである。現状の河岸段丘崖は2次調査地付近で西方に直角に屈曲するが、これは近代以降の土地改変の結果であろう。江戸時代後半までは、1次調査地西側から3次調査地まで直線的に延びる河岸段丘崖があり、その崖下の河原に近い場所で部分的に水田が営まれていたのである。この水田が埋め立てられたのは明治以降のことであり、レンガ工場建設に伴うものであったと考えられる。宇治では、明治4年の黄檗弾薬庫の設置、明治27年の宇治火薬製造の建設が行われており、現在でも自衛隊黄檗駐屯地にはレンガ建物が残されている。このレンガ工場もそれらの建設に関係したものと思われる。



第41図 調査地の完掘状況

抄 録

ふりがな	おちかたいせきはくつちょうさがいほう							
書名	乙方遺跡発掘調査概報							
副書名	京阪宇治駅移転に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第 38 集							
編著者名	杉本 宏、吹田 直子、内田 真雄							
編集機関	宇治市教育委員会							
所在地	京都府宇治市宇治琵琶33番地							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな 所収文化財	ふりがな 所在地	コ ー ド 市 遺跡		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
おちかた 乙方遺跡	うじおちかた 宇治乙方34 ほか	20264	69	34度 46分 30秒	135度 48分 34秒	920515 ∟ 930312	1,435㎡	駅移転
文化財名称	種 別	時 代	遺 構	遺 物	特記事項			
乙方遺跡	集 落 跡 近世瓦窯跡	弥生時代 古墳時代 江戸時代	竪穴住居跡 方形周溝墓 壺棺、土壇墓 近世粘土採り跡	弥生土器 須恵器、石皿 近世瓦 近世陶磁器				

OCHIKATA SITE EXCAVATION REPORT
(Uji City Excavation Report No.38)
1997
Uji Municipal Board of Education
Kyoto pref. JAPAN

乙方遺跡発掘調査概報

—京阪宇治駅移転に伴う発掘調査—
(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第38集)

発行日 平成9年3月31日
発行 宇治市教育委員会
〒611 京都府宇治市宇治琵琶33番地
TEL 0774-22-3141(代)
編集 社会教育課 文化財保護係
印刷 (有)新進堂印刷所

